

森田。

いかん、いかん。(進る。) あんたが行くには及ばん。わしだけで澤山ぢや。

(下のかたより雨倉彌太郎は弾にあたりし體にて駈け來りて倒れる。)

西郷。

(せはしく。) 遣られたのは誰ぢや。

森田。

(雨倉をかゝへ起す。) 雨倉でござす。

西郷。

雨倉か。(進み寄る。) これ、しつかりせい。

森田。

しつかりせい、しつかりせい。

(人々は雨倉を呼び活けようとする。小銃の音。正面の木のあひだより私學校の焼くる煙みゆ。下のかたより飯原勝彌は負傷したる武上一作を肩に引つけて出づ。)

西郷。

おゝ、又遣られたか。

森田。

今度は誰ぢや。

飯原。

武上一作でござす。

西郷。

武上か。こゝはわしが引受くる。おまへ達は早うゆけ。

飯原。

はあ。

森田。

(兵士等に。) おまへ等も行け。

兵士一同りはあ。

(飯原と兵士等は下のかたに走りゆく。)

彦吉。

(負傷者をのぞいて。) やれ、やれ、みんな可哀相になあ。

森田。

どつちもむづかしさうでござすな。

西郷。

せめて一人でも生かさにやいかん。

(西郷は肌をぬぎてシャツになり、武上をかゝへ起す。)

森田。

虎吉、早う水を持って來い。

虎吉。

はい、はい。(下のかたへ走りゆく。)

西郷。

武上……。どうぢや。

森田。

雨倉……。雨倉……。

(二人はしきりに負傷者を介抱してゐる。小銃の音。私學校の火の手はだん／＼に燃えあがる。上のかたより桐野利秋は足早に出づ。)

桐野。

(火を見る。) おゝ、焼くる。焼くる。おゝ、西郷さん。あの通りに焼けますわ。

(西郷と森田は見かへる。)

森田。お、學校が焼くる……。

桐野。(ふたりは思はず手を放せば、雨倉と武上はそのまゝ倒れる。學校の火はいよゝゝ熾になる。) 學校もたうとう灰になるか。

森田。われゝゝの古巢も焼かれてしまふか。(あざ笑ふ) いつそ思ひ切りが好いかも知れんな。

西郷。むゝ。焼くる……。

桐野。古巢が焼くる……。

(三人は火のあがるをちつと眺めてゐる。)

—幕—

### 第三幕

城山土窟の前。正面には崖の裾を覆りたる土窟三ヶ所あり。いづれも間口は一間ぐらゐ、高さは一間半に過ぎず。崖には秋草生ひしげりて、上より稍や黄ばみたる紅葉の枝など差し出でたり。所々

に杉の大樹ありて、これにも蕨など纏へり。左右は雜木林にて、熊笹なども生ひたり。九月二十三日、舊曆八月十五夜の月あきらかにして、蟲の聲しきりに聞ゆ。

(下のかたより鰻屋音吉は薄縁をかゝへて出で、月のひかりを仰いでゐる。やがてあとより西郷の僕虎吉もおなじく薄縁をかゝへて出づ。)

虎吉。うなぎ屋さん、やつぱりこゝらが好からうかね。

音吉。月を観るにはどうもこゝらですね。

虎吉。むゝ。いゝ月だな。

音吉。いゝ月ですね。

(ふたりは月を仰いでゐる。下のかたより出前持の六松は頭に纏帯して、葡萄と柿栗などを入れたる籠をかゝへて出づ。)

六松。お酒盛はこゝで始まるんですか。

音吉。こゝらが好さうだ、さあ、そろゝ支度を始めようか。

(三人はよきところに薄縁を敷く。下のかたより濱津の僕伊八は二つの酒壺をかゝへて出づ。)  
皆さん、御苦勞ですね。もうお支度は出来ましたか。

城山の月

音吉。お酒はありましたかね。

伊八。なにしろ四方八方を囲まれて、買ひに出ることが出来ないのだから仕様がありませんよ。

虎吉。方々の御屋敷にある酒もみんな飲み盡してしまつたのですからね。

伊八。それでも何處からか探して来て下すつたかね。

虎吉。小川さんの御屋敷でやうくこれだけ貰つて来ましたよ。いやもう甚いどぶろくで、とて

も皆さん方にはあけられないと云ふのですが、それでもまあ可いからと云つて無理に貰つて来ました。

虎吉。かうなれば何でも結構。さあ、さあ、これで御座敷が出来た。それではこれから手分けを

して、皆さんのところへ報せて来なければならぬ。

三人。さうだ、さうだ。

(人々はそこらを整理して、音吉と六松は上のかたに去る。伊八は下のかたに去る。虎吉は第二の土窟の前にゆきてひざまづく。)

虎吉。旦那様、もう御支度が出来ましてございます。

(虎吉は更に第一の土窟の前にゆきて、塵をかける。)

虎吉。桐野様、どうぞおいで下さい。

(虎吉は更に第三の土窟の前にゆきて塵をかける。)

虎吉。森田様、もう宜しうございます。

(云ひ終りて、虎吉は下のかたに立去る。蟲の聲絶えず、そのあひだには鼻の聲もきこゆ。第二の土窟の入口を掩ひたる枯枝などを押分けて、白の單衣を着たる西郷隆盛出づ。やがて第一の土窟をくゞりて桐野利秋出づ。)

西郷。ほう、よい月ぢや。丁度舊曆の十五夜ぢやとか云ふことでござりますが……。

桐野。まつたく空はよう晴れてるますな。

(第三の土窟より森田金八郎出づ。)

森田。明るい晩でござすな。

西郷。このごろは敵の砲撃がはけしいので、夜でも迂濶には出られん。一三日振りて明るい月を見て、はれんくしい心持になつたぢやござせんか。

(三人は立つたるまゝにて月をながめてゐる。)

桐野。西郷さん。一詩出来んか。

城山の月



西郷。(又坐る。)西郷さん。あんたは濱津さんになんと云うて遣つた。

森田。なんと云うて遣つても可いぢやないか。

西郷。いや、よくない。西郷さん。あんたは自分ひとりが腹を切つて、みんなの者を助けてくれと云うて遣りやせんか。

(西郷は答へず。)

桐野。(詰めよる。)西郷さん。あんたはそんなことを云うて遣つたか。そんな馬鹿なことを云うて遣つたか。

(西郷は答へず。)

森田。濱津さんはどうもいかなう。

西郷。まつたくいかな。このあひだは西郷さん一人を助けるのを條件にして、われ〜一同に降伏せいと勤める。今夜は又西郷さんの使にゆく。何がなんだか判らんぢやないか。

森田。(俄に口をひらく。)なんぢや、森田さん。もう一度聞かしてくれ。濱津さんはこの間、西郷ひとりを助けるのを條件にして、一同に降参せいと勤めたか。

森田。さうでござす。

西郷。

あ、いかな。それぢや濱津さんを遣るぢやなかつた、敵の方へ行つて何をいふか判らん。西郷を助けてくれなどとあべこべのことを云やせんかな。こりや困つた。悪いことをしたなう。

桐野。

一體あんたが我々に相談もせずに、濱津さんを出してやるのが悪い。あんな人を出してやれば、どつちにしても碌なことになりやせん。

西郷。

濱津さんはそんなことを考へて居つたのかなう。

森田。

まあ、ようござす。あの人が何と云うて戻つても、こつちで取合はんけりやそれで可いのでござすから。なあ、桐野さん。

桐野。

まあ、構はんでおけばよいのぢや。

(西郷は黙して考へてゐる。下のかたより平田壯之助、上村源三、飯原勝彌、鮫島新七の四人出づ。

あとより虎吉と伊八も出づ。)

四人。

遅うなりました。

(四人は會釋して坐る。)

桐野。

やあ、みな来たか。前線に居るものは持場を捨てゝ來るといふわけにも行かんで、氣の



虎吉。

うなぎ屋さん。大分手きびしく叱られますね。

音吉。

かうして遠慮無しに吐つてくださるのもお馴染甲斐でございますよ。(涙ぐむ。)

有馬。

その代り、これからは貴様の家の障子を破るものも無いわ。

谷山。

出前持をなぐる者もないわ。

有馬。

安心しろ、安心しろ。

音吉。

いえ、かうなりますと障子や襖を些とぐらゐ損じられましても、やつぱり相變らす御最届

平田。

を願ひたうございます。

上村。

どうぞや、出前持。

六松。

貴様も相變らす殿られたいか。

西郷。

(頭をおさへる。) さあ、それはどうも……。相變るやうに願ひます。

飯原。

ほんに出前持は負傷して居る。おまへ達が殿つたのか。

飯島。

いや、今度のはさうぢやござせん。

坂本。

崖から轉け落ちて自分で負傷したのでござすよ。

六松。

こいつ意氣地がないもんぢやで、小銃彈の飛んで来るのに驚いて、逃げるはずみに轉け落

ちたのでござす。

伊八。

六さんも評判が悪いやうだ。口塞けにお酌でもしたら何うだね。

六松。

そんなことにしませう。

(六松は上の兵士等に酌をする。伊八も下のかたの兵士等に酌をする。西郷、桐野、森田も音吉の酌にて飲む。)

酒は悪いが、久振りでよい心持になつた。どうぞちや。誰か劍舞でも遣らんか。

西郷。

飯原、遣れ。

飯原。

はあ、飯島、吟聲をたのむぞ。

森田。

(飯原はまん中に進み出れば、飯島は「鞭聲轟々」を吟じ、飯原は刀をぬいて舞ふ。上の二句を終

森田。

りしときに、森田が聲をかける。)

森田。

さあ。みなも一緒に吟じろ。

森田。

(兵士等は聲をそろへて、「遺恨十年」以後の二句を吟す。飯原は舞ひ終る。人々は手を拍つ。飯原

森田。

は一禮して退く。)

森田。

流星光底長蛇を逸す。謙信も残念ぢやつたらうなう。

城山の月

西郷。は、それはもう云はん筈ぢや。これ、虎吉。

虎吉。はい。

西郷。今度はおまへの番ぢやぞ。いつもの馬方踊でも遣らんか。

虎吉。いや、それは御免を蒙ります。

伊八。旦那様のお聲がかりだ。ぢいやがお箱の馬方踊といふのを是非みせて貰ひたいな。

兵士一同。ぢいやも遣れ、遣れ。

伊八。さあ、遣つた、遣つた。

(伊八は無理に虎吉を引き出さうとする。)

虎吉。いや、いけない、いけない。

(ふたりは捨臺詞にて争ふところへ、下のかたより石村賢次郎出づ。)

石村。先生に申上げます。

西郷。石村。なんぢや。

石村。濱津さんがお歸りになりました。

森田。濱津さんが歸つた。(起ちかゝる。)

西郷。まあ、よい。(石村に。濱津さんが歸つたらこゝへ通せ。)

石村。はあ。(引返して去る。)

虎吉。やれ、やれ、いゝ所へ濱津さんが来て下さつて、これで先づ助かつた。

(下のかたより石村は濱津應輔を案内して出づ。)

西郷。やあ、濱津さん。御苦勞でござした。

濱津。唯今歸りました。

(濱津は一同に會釋して座に着く。)

濱津。早速ですが、井口守衛は捕縛されたさうでござす。

西郷。井口さんはやつぱり捕縛されましたか。

濱津。九月六日に捕縛されたと云ふことを今晚敵陣で承知しました。それは先づそれとして……

(一座を見まはす。こゝで一切を申上げて宜しうござすか。)

西郷。よろしうござす。差支へござせん。

濱津。敵の本營へ赴きまして、使の口上を申述べましたところ……。 (云ひかけて躊躇する。)

西郷。敵の方ではなんと云ひました。

濱津。もし果して講和の意思があるならば、西郷自身に本營へ出向いて來いとのことではした。

(一座俄に色めく。)

森田。なに、西郷さん自身に本營へ出向いて來いと……。濱津さん。あなたは一體どういふ使に行つたのでござはすか。

濱津。西郷先生のお使にまゐりました。

桐野。それは判つて居るが、その使はどういふ口上でござはすか。

濱津。え。(躊躇する。)

西郷。(しづかに。)かうなつたら正直に何も彼も云はにやならん。わしが濱津さんに頼んだ使の口上は、森田さんの想像した通り、西郷一人が自滅して、一統の者を無條件で助けてくれと云うて遣つたのぢや。

(一座は又色めく。)

森田。西郷さん。

兵士一同。先生。

西郷。まあ、騒いぢやいかん。そこで、濱津さん。あなたは敵陣へ行つて何と申込んだのでござはすか。

濱津。かうなればわたしも正直に申します。わたしは先生の御口上を逆に取次いたのでござはす。われ／＼一統は尋常に降伏して、いかやうの處刑にも服しますれば、西郷先生一人だけは無條件で助命してくるゝやうにと……。

森田。(堪へかれて。)濱津さん。あなたは又それを云ふたか。この間もあれほど云うて聞かせたに、まだ判らんでそんな小刀細工をする。あんた何うでも西郷さんや我々に恥辱をあたへたいのか。

桐野。濱津さん。あなたも随分強情ぢやなう。さうして、敵の方では西郷さん自身に本營へ出向いて來いといふ。それに對して、あなたは何と返答したのでござはすか。

濱津。それでは西郷先生自身が敵の軍門に降るやうなものぢやで、とても御承諾はあるまいと、わたしも頻りに争ひました。勿論、一生懸命に争ひましたが、先方ではどうしても肯入れません。兎もかくも立歸つて、今夜の十二時までには有無の返事をしろ。その時刻までなんの返事もなければ、西郷は不承知のものと認めて、明朝四時から總攻撃を開始するとのこ

とでござはした。

西郷。

さうでござはしたか。西郷ひとりが切腹して、みなのを無條件で赦してくるよと云ふならば、わしは勿論覺悟の前ぢやが、西郷自身に出向いて行つて、敵の軍門に降伏せよと云ふのでは、どうも承知は出来んな。

兵士一同。勿論でござはす。

森田。

かりに敵の方で、西郷さんが切腹したらわれ〜一同を赦すと云うたところで、承知の出来るものぢやない。又、われ〜一同が降伏して西郷さん一人を助くると云ふたところで、西郷さんが承知する筈がない。どつちにしても、濱津さん、所詮無駄であることは判り切つて居るぢやござせんか。

西郷。

まあ、さう濱津さんを責めんがよい。たとひ口上を逆に取次がうとも、もと〜濱津さんを出して遣つたのはわしぢや。悪かつたらばあやまる。勘辨してくれ。そこで、敵の方では今夜の十二時までには返答せよと云ふのでござはすな。

濱津。

さうでござはす。  
(一座を見かへる。)その返答をどうするかな。

桐野。

勿論返答する必要はござはすまい。

森田。

たゞ打つちやつて置けばよいのでござはす。

兵士一同。

勿論でござはす、勿論でござはす。

西郷。

わしもさう思ふ。それでもう事は決まつた。なにも考へることも議論することもござはすまい。敵の總攻撃はあしたの午前四時ぢやといふから、まあ、ゆつくり飲まうぢやござせんか。

桐野。

ようござはせう。

森田。

ようござはせう。

西郷。

まだ酒はあるかな。

音吉。

まだ少々はございます。

西郷。

ついでくれ。

音吉。

はい、はい。

石村。

(音吉は酌に立たうとする時、末座より石村すゝみ出づ。)  
先生。そのお酌はわたくしにさせて下さい。

西郷。では、石村、おまへに頼まう。

石村。はい。

西郷。おまへ泣いて居るか。  
(石村はすゝみ出て、音吉より酒壺をうけ取り、西郷の前に出て酌をする。)

石村。いえ、泣いては居りません。東京から先生のおあとを慕つてまゐりまして、三年越し御世話になりながら、碌々御恩返しも出来ませんで、唯それが残念でございます。

西郷。わしの方こそ碌々におまへの世話も出来んで、却つてお前の世話になつた。くどくも云ふやうぢやが、お前だけは歸つたらどうか。

桐野。おまへは他國者ぢやで、歸つてもよいぞ。

石村。それは考へました上で、あらためて申上げませう。就きましてはわたくしは一旦退席いたしても宜しうございませうか。

西郷。お、勝手にするがよい。

石村。はい。

(石村は西郷の顔を仰ぎ、暗に訣別の意を表して下のかたに去る。海軍の軍樂の聲遠くきこゆ。人

人は耳をかたむける。)

森田。海軍の樂隊らしいな。

濱津。敵は明朝總攻撃の準備として、今夜は各部隊に休養をあたへ、海軍の軍樂隊を上陸させて陣中で奏樂させるとか聞きましたれば、大方それではせう。

西郷。さうでござるか。四面楚歌の聲とは違つて、樂隊の方が賑かてようではせう。

桐野。敵の音樂で酒飲むのも面白からう。

(軍樂の聲つゞけてきこゆ。人々は再び酒を飲む。)

西郷。ほう、月はますます冴えて來た。(空を仰ぐ。)

兵士一同。いゝ月でござすなう。

森田。これでは明日も天氣ぢやらう。

西郷。む、天氣ぢやらう。時にどうぢや。若い者どもは眠たくはないかな。

森田。どうで明日からはいつまでもゆつくり眠られるんぢや。徹夜しても好うではせう。

桐野。しかし眠りが足らんと、いざと云ふときに思ふやうに働けんぞ。誰もかれも今夜かぎりの命ぢや。手足をのぼして高射で眠つたらどうぢやな。

西郷。

さうぢや。今夜かぎりの命にしてからが、出来るだけは好う眠らにやいかん。ほかに御馳走もないんぢやから、もうこのくらゐにして寝たら何うか。

有馬。

では、われくはもう御免を蒙らうかな。

飯原。

むむ、さうしようか。

鮫島。

では、皆さん。ごめん下さい。

兵士一同。

御めん下さい。

西郷。

踏んぞり返つて寝にやいかんぞ。

一同。

はあ。

(兵士等は西郷をはじめ、桐野と森田にも會釋して、左右にわかれて去る。軍樂の聲絶えずきこゆ。)

虎吉。

ちつとそこらを片附けませうか。

森田。

もう酒はないかな。  
(虎吉と六松は兵士等の薄縁を片附ける。)

(音吉と伊八は酒壺を振つて見る。)

音吉。

もうおつもりになりました。

伊八。

こちらも空になつてしまひました。

桐野。

酒が無うなつたら水を飲んだら可いぢやないか。それがほんの水杯ぢや。

森田。

そんな芝居のやうなことは、おれは嫌ひぢや。(さかづきを投げ捨てる。)では、酒盛はもう

桐野。

止めにして、寝る前に一度、前線を見まはつて来ようかな。

西郷。

さうぢや。明朝四時には敵軍の總攻撃が始まるといふことを各部隊にも通知して、最後の

桐野。

決戦準備をさせにやなるまい。

西郷。

何分たのみますぞ。

桐野。

ようごはす。では、森田さん。行かう。

森田。

むむ、行かう。(西郷に)われくには構はんでお休みください。

西郷。

もうこゝらを片附けたら何うぢや。  
(桐野と森田は上のかたに去る。)

虎吉。

はい、はい。

(虎吉、伊八、音吉、六松等は薄縁や酒の道具を片附けはじめる。西郷は起ちあがりて月を仰ぐ。)

濱津も思案しながら起つ。

西郷。

濱津さん、今夜は家へ戻つたら何うでござす。奥さんが待つて居るぢやらうが……。

濱津。

それよりも先生。あんたはもう一度おかんがへ下さらんか。

西郷。

なにを考へるのでござすか。

濱津。

(左右を見かへる。)そこらを片附けてしまふたら、おまへ達はあつちへ行つてくれんか。

四人。

はい、はい。

西郷。

あしたはいよく敵の總攻撃ぢや。おまへ達は彈の來るところに隠れて居れよ。

四人。

はい。

(音吉、六松、虎吉、伊八は西郷と濱津に一禮し、しなくとして下の方に立去る。月の光いよく明るく、軍樂の聲きこゆ。西郷は月と共に澄めるやうな心にて、いつまでも空を仰いでゐる。濱津もしばらく黙してゐる。下のかたより濱津の妻お秀出づ。)

お秀。

(濱津を呼ぶ。)あなた。

濱津。

秀か。

西郷。

(見かへる。)やあ、濱津の奥さん。どうして今頃おいでよござした。わたしも今、濱津さん

お秀。

に今夜は歸れと云うて居つたところではしたよ。(微笑む。)

いえ、わたくしは主人をたづねて参つたのではござりません。先生のお迎ひにまゐりました。

西郷。

わたしの迎ひに……。

お秀。

左様でござります。御承知の通り、主人の應輔はこの朔日以来、めつたに屋敷へ歸つたこととはござりません。それが先刻めづらしく戻つてまゐりまして、わたくしに色々の相談がござりました。(濱津に。)もし、あなた。まだ先生にお話をなさらないのでござりますか。

濱津。

まだそれをいひ出す機會がないので、實はさつきから苛々して居つたのぢや。先生。うるさく申上げるやうでござすが、もう一度お考へ直しはなりませんまいか。

(西郷は無言にて首をかしげる。)

濱津。

先生の御覺悟はよく判つて居ります。それを今更兎やかくと申上げるのは恐れ入りますが、

どう考へても先生をこのまゝ亡ぼしてしまふのは餘りに残念でござす。まつたく残念でなりません。しかし敵の方でわれ々の要求を容れてくれん以上、先生のお命はもう一日に迫つて居るのでござす。

城山の月

お秀。それをどうかしてお救ひ申したいと、主人も色々心配いたしましたして、一先づあなたをわたくし共の屋敷内へお隠まひ申すことに致しました。

西郷。あんた方の屋敷へ行く……。

濱津。さうでござす。わたしの屋敷は構へも廣うござすから、御窮屈でも奥の座敷の床下にお忍びくだすつたら、敵の方でも容易に氣がつくまいかと存じます。さうして、圍みの解けたころに竊と抜け出すやうになされては如何でござせう。

お秀。たとひ主人が居りませんが、わたくしが命がけで屹と御守護いたします。かならずお隠まひ申します。

濱津。萬事は家内が心得て居りますから、夜の明けんうちに早うお越しく下さい。

(西郷は黙してゐる。)

濱津。先生。

お秀。御不承知でござりますか。

西郷。(しづかに)承知不承知をいふ前に、先づあんた方に訊きたいことがござす。今年の二月以來、肥後と日向と薩摩の三ヶ國を戰場にして、薩摩の若い者が何千人死にましたか。

二人。え。

西郷。その何千人を殺して置いて、西郷ひとりが生きて居つて好うござすか。

(夫婦は顔を見あはせる。)

西郷。折角の御深切ぢやが、もう何にも云うてくださるな。まして西郷は賊軍の大將でござす。西郷は朝廷に對して毛頭も不忠を存するものではござせんが、不幸にして賊徒の名を負はねばならぬ身の上となりました。その罪を洗ひきよむるには、自分の血を以てするより外はござせん。わたしは熊本で死なうとしました。日向の長井でも死なうとしました。それが二度ながら妨げられて、死ぬにも死なれん苦しい月日を送つて居りましたが、明日こそはいよいよ最後の捌きを受くる日となつたのでござす。濱津さん、わかりましたか。

濱津。はい。

西郷。奥さんも判りましたか。

お秀。はい。(泣く。)

(下のかたより有馬銀之助と虎吉出づ。)

有馬。先生。石村が割腹いたしました。

城山の月

西郷。

石村が腹を切つた……。

有馬。

谷の出口の路ばたで、立木の根下に寄りかゝりながら、見事に腹を切つて居りました。別に書置のやうなものも無かつたか。

有馬。

なんにもごはせん。死骸の口には女子の髪の毛らしいものを銜へて居りました。女子の髪の毛を銜へて居つたか。

虎吉。

それはこの間わたくしが竊と届けてあげたのでございます。

西郷。

お弓さんのか。

虎吉。

(聲を濡ませて。) はい。

西郷。

石村は東京へも歸らず、西郷とも一緒に死なず、お弓さんと一緒に死んだか。可愛い奴ぢやなう。

虎吉。

まつたく可愛い。いや、可哀さうな人でございます。(眼をふく。)

森田。

(上のかたより森田金八郎出づ。)

西郷さん。桐野と一緒に前線をまはつて、あすは敵の總攻撃のあることを傳へますと、いよく最後の決戦ぢやと云うて、若い者どもは皆勇んで居りますわ。

西郷。

さうか。みな元気が好いなう。そこで、森田さん。あなたは熊本約束を忘れやすまいな。

森田。

たしかに覚えて居る。わたしはあなたと一緒に死にます。

西郷。

死ぬるのは勿論ぢやが、わしは決して戦はうとはせん。たゞ敵の弾の飛んで来る方へ進んで行くのぢや。いよく西郷が倒れたと見たならば、あなたすぐに介錯してくれんか。

森田。

ようごはす。

西郷。

介錯の役は石村と決めて居つたのぢやが、あれはもう生きて居らん。

森田。

石村は生きて居らん。どうして死んだのでござるか。

西郷。

まあ、それを詮議せんでもよい。鬼もかくも介錯はあなたに頼みますぞ。

森田。

ようごはす。引受けました。(お秀を見る。) やあ、濱津の奥さん。もっいよくお別れでござすぞ。

お秀。

お名残惜うござります。

西郷。

あなたに作つて貰ふたこの經帷子がいよく明日のお役に立ちますわ。

濱津。

(寢鳥のおどろき起つ羽搏きの音きこゆ。人々見かへる。)

濱津。

なんぢやらう。鳥が騒ぐ。

城山の月

西郷。あまりに月が好いので、鳥も途惑ひをしたのでござはせう。森田さん。もう寝ようか。

森田。寝ませう。(笑ふ。)地獄の夢でも見るかな。

西郷。あすは極樂でござはすよ。森田さん。

森田。む。

西郷。

(再び空を見る。)よい月ぢやござせんか。わしは今までこんなに澄んだ月の光を見たことがない。真如の月といふのはこれではせうな。

森田。

(左のみ感せぬやうに。)さうかも知れませんな。

(西郷は空を指さして、濱津夫婦にも月を見よといふ。軍樂の音遠くきこゆ。)

幕

### 第四幕

(1)

岩崎谷、濱津屋敷の門前。下のかたに大なる土族屋敷の黒門を斜めに飾りて、下の方より上のかたの奥へ通ふ道路あり。門の左右は竹藪なり。所々に黄葉の大樹ありて、正面の奥には畑地や森を隔て、城山の一部分ゆ。九月廿四日の曉、あたりは一面のあさ霧に掩はる。

(幕あくと、小銃の音、喇叭の音きこゆ。門内より伊八は頬かむり、筒袖、身輕のこしらへにて出で、あたりを窺つてゐる。向うより平田壯之助、上村源三、いづれも抜刀にて走り出づ。)

本田。むやみに撃ち居るな。

上村。氣をつけろ。

(ふたりは幾たびか地に伏して弾丸を避けながら奥の方へ走りゆく。)

伊八。まつたく無暗に撃つな。旦那様はどうなすつたかしら。

(奥の方より鱧屋音吉は、向う鉢巻、繩たすきにて走り出づ。)

音吉。(透しみる。)伊八さんぢやないか。どうもひどい霧だね。

伊八。こゝらは秋になると霧がひどいのだ。なにしろ山間だからな。(空を見る。)もう夜が明けさうなものだ。

(小銃の音つゞけてきこゆ。)

音吉。

あぶない、あぶない。こゝらへも無暗に飛んで来るぞ。

(向うより谷山盛彦、坂本宗平の二人は矢張り抜刀にて走り出で、門前に来りし時、坂本は彈丸に  
あたりて倒れる。)

谷山。

あ、やられたか。

坂本。

やられた。残念ぢや。

坂本。

(坂本は起きんとして又倒れる。音吉と伊八は走りよる。)

二人。

もういかん、いかん。

谷山。

しつかりなさい、しつかりなさい。  
こゝはお前達にたのんだぞ。

(云ひすて、谷山は奥のかたへ走りゆく。音吉と伊八は捨臺詞にて坂本を介抱しながら門内に連れ  
込む。奥より六松走り出で、門前にて呼ぶ。)

六松。

奥さん、奥さん。

(門内よりお秀出づ。つゞいて伊八も出づ。)

六松。

奥さん。ここちらの旦那様がやられました。

お秀。

え、旦那様が……。

伊八。

そ、それはどこで遣られたのだ。

六松。

こゝから四五町先の森の前で……。

お秀。

彈に中つたのでござりますか。

六松。

なんでも胸のあたりを遣られたらしうございますよ。

お秀。

そんなら早く……。

(お秀は駆けて行かうとするを、伊八は遮る。)

伊八。

まあ、おあぶなうございます。旦那様はわたくしがお連れ申してまゐります。おい、六さ

ん。案内してくれ。

六松。

あい、あい。

(六松と伊八は奥の方へ走りゆく。小銃の音いよゝゝ烈しく、お秀はうろくしながら奥の方を窺  
つてゐる。門内より音吉出づ。)

音吉。

奥さん。そこらに出てゐるとお危なうございますよ。

お秀。

旦那様が撃たれたさうで……。

音吉。

え、旦那様が……。そりや大變だ。伊八さんは何うしたらう。

お秀。

六松さんと一緒に出て行きました。わたしも鳥渡行つて見て來ます。

(お秀は又ゆきかゝるを、音吉はひき留める。)

音吉。

いえ、おあぶなうございます。あぶなうございます。

お秀。

でも、斯うしてはゐられません。放してください、放して下さい。

音吉。

いけません、いけません。奥さん、まあ、お待ちなさい。

(音吉は無理になだめてお秀を門内に連れ込む。小銃の音つゞけて開ゆ。霧はだんく明るくなる。向うより西郷隆盛は白木綿の紋付に袴をつけ、大小をさし、扇を持ち出て出づ。そのあとより森田金八郎は抜刀にて出づ。つゞいて有馬銀之助、飯原勝彌、鮫島新七、いづれも抜刀にて附き添うて出づ。花道の途中にて、西郷は右の股を撃たれて小膝をつく。)

森田。

あ、やられたか。西郷さん。

西郷。

右の股を遣られた。

森田。

もう好うごはすか。(介錯するかと訊く。)

西郷。

いや、まだいかん。もつと正面まで出て討死せにやいかん。それでなければ本當の死様ぢやない。

(西郷はなほ進んで舞臺のまん中に来る。有馬、飯原、鮫島は駆けぬけて、西郷の楯にならうとする。)

西郷。

いや、楯になつてくれちやいかん。退いてくれ、退いてくれ。

(西郷は扇にて三人を押退けて、奥のかたへ進まんとする時、小銃の音はげしく、人々は地に伏す。)

西郷ひとり立つたるまゝ進まんとして、彈丸に臍腹を撃たれ、再び倒る。)

森田。

(聲をかける。)

西郷。

む。これで仕舞ぢや。金八どん。東京の方角はどつちでござすな。

森田。

東京は矢はり日の出る方角でござせう。(奥のかたを指さす。)

西郷。

(西郷は土に手をつき、形をあらためて奥の方に一禮す。)

森田。

これで可い。たのみますぞ。

三人。

はあ。ようござす。(刀をふりあげて躊躇する。)

どうも往來ぢやいかん。(三人に。)

おい、先生をこの家へかゝへ込め。

三人。

はあ。

(有馬、飯原、鮫島は西郷をかへ起さうとする。門内よりお秀走り出づ。つゞいて音吉も出づ。)

お秀。お、先生も……。

音吉。早く内へお連れ申しませう。

虎吉。(お秀と音吉は三人に手傳ひて、西郷を門内へかへ入れる時、向うより虎吉走り出づ。)

森田。森田さん。旦那様は……。

虎吉。西郷さんは撃たれた。

森田。え。

森田。おれと一緒に来い。

(森田は門内に入る。虎吉もあわて、門内に入る。霧はいよゝゝ明るくなる。向うより桐野利秋は)

小銃を持ち、兵士五人も小銃を持ちて走り出づ。)

桐野。(命令する。)折敷け。

(桐野も兵士も地に折敷きて、奥の方にむかつて亂射す。)

桐野。(再び命令する。)起て。

(桐野は先に立ちて進まんとする時、門内より森田出づ。)

森田。桐野さん。

桐野。(見かへる。)お、森田。まだ死なんか。

森田。役目をすませたから、これからぢや。

桐野。西郷さん何うした。

森田。約束通りに介錯した。

桐野。では、西郷さん遣られたのか。

(兵士等もおどろく。門内より虎吉は西郷の首級を白布につゝみて抱へて出づ。あとより飯原と鮫)

島も出づ。)

虎吉。桐野さん、丁度よいところへ……。旦那様は……。(布に包みしまゝにて首級をみせる。)

桐野。(片手で拜む。)敵に見付からんところへ早う持つて行け。

虎吉。はい。

(虎吉は首級をかへて向うへ走り去る。)

森田。(飯原等に。)貴公等は戦線をかけまはつて、西郷先生はもう戦死したと知らせて来い。

二人。はあ。

飯原。 鮫島。

西郷先生は撃たれたぞ。先生は戦死なされたぞ。西郷先生は撃たれたぞ。先生は戦死なされたぞ。

桐野。

(ふたりは同時に叫びながら、飯原は奥の方へ、鮫島は向うへ走り去る。)

森田。 兵士一同。

(おなじく聲を揃へて。) あつまれ、集まれ。

(入々は四方にむかつて呼ぶ。やがて桐野は兵士等に指圖して門内に入る。森田ひとり門前に立つてゐる。奥の方にて「西郷先生は撃たれたぞ。」と呼ぶ聲々遠くきこゆ。やがて門内より有馬銀之助と兵士五人、それに音吉も手傳ひて、白布をかけたる西郷の死骸を疊にのせて運び出す。あとより桐野も附いて出づ。お秀は草花を持ち、お雪とお道も出づ。人々は死骸を地におろせば、桐野も坐る。森田も坐る。他の人々も無言にて、死骸を取り圍みて坐る。お秀は涙ながらに草花をさげける。奥のかたより飯原を先に立て、兵士十餘人走り出づ。向うよりも鮫島を先に兵士七八人走り出づ。いづれも西郷の死骸をみて、一度に地に坐して手をつく。小銃の音。喇叭の音。正面の空だんだんに薄紅くなる。)

(11)

前の幕を閉じると、午後六時の鐘の響きこゆ。それを打ち切ると、すぐに再び幕をあける。やはり前とおなじく、濱津屋敷の門前。城山没落より幾日か後のゆふぐれ。水の音さびしく、落葉しきりに降る。

(旅僧西照は進藤勇吉の手をひきて立つ。勇吉は十六歳の盲目の少年、胡弓を背負つてゐる。)

西照。

(しづかに。) 進藤さん、こゝが城山の岩崎谷、西郷さんの戦死なされた所ですぞ。

勇吉。

(見えぬながらに見まはす。) では、こゝが岩崎谷でございますか。(ひざまづく。)

西照。

さうです。西郷さんはこの濱津さんの屋敷の前で、弾にあたつて戦死なされたのです。

勇吉。

桐野さんも森田さんも……。

西照。

その人達も西郷さんの最期を見とめて、思ひ／＼に戦死なされたと云ふことです。悼ましいことぢやが、是非もない。あなたには判るまいが、この二月に來た時にくらべると、鹿兒島の町もまるで變つてゐます。今度の戦争のために町は半分以上も焼かれてしまひま

城山の月

した。

勇吉。

半分以上も焼けましたか。

西照。

縣廳も焼けました。私學校も焼けました。家をうしなつた者が何萬人とか云ふことです。

いや、それでも家をうしなつた者は、新しく建て直す望みもありますが、今度の戦争で命をうしなつた者は七千人以上だとか云ふことです。

勇吉。

七千人……。怖ろしいことだと思いますな。(思はず地に坐る。)

西照。

(共にひざまづく。)まつたく怖ろしい。その中には病氣で死んだ人もありませうが、兎もかくもこの二月に鹿兒島を出て行つた士族や私學校の生徒のなかで、七千人あまりは若い命を西郷さんにさへけてしまつたのです。男ばかりでなく、女でもあなたのお母さんのやうな人が幾人もありませう。酷たらしいとも、悲しいとも、實に云ひやうも無いくらゐです。

勇吉。

それは誰が悪いのでせう。敵が悪いのでせうか、味方が悪いのでせうか。

西照。

いや、敵もない、味方もない。誰が悪いのでもない。所詮一度は斯うならなければならなかつたのです。今度の戦争も決して無駄にはなりません。どの人も無益に血を流したので

勇吉。

はありません。これまで何かの機会を見て騒ぎ立てようとしてゐた士族の人達も、これではみんな鎖まります。西郷さんでさへも成功しなかつた戦ひを再び始めようとするやうな、無謀な者は恐らくありますまい。今まで剣や鐵砲で戦はうとした者が、これからは議論で戦ふことになります。剣や鐵砲が文章や演説に變ります。それだけでも非常の進歩ではありませんか。さうして、世の中がだんくんに文明に導かれてゆくのです。

西照。

成程さうかも知れませんが、いや、往來で飛んだ長話をしました。さあ、けふも既う暮れかゝつて、山のあき風が身に

勇吉。

しみて來ました。そろ／＼と行きませうか。

西照。

はい。

勇吉。

さあ、お起ちなさい。

西照。

西郷先生がこゝでおなくなりなされたかと思ひますと、なんだか動くのが忌になりました。

西照。

(聲を濕ませる。)御もつともです。では、進藤さん。西郷さんへ手向けのために、こゝであ

なたの胡弓をお聴かせ申してはどうです。

城山の月

勇吉。さういたしましたせうか。

西照。それがあなたのお志です。さあ、お弾きなさい。

(西照は手傳ひて勇吉の背より胡弓をおろせば、勇吉は立木の根もとに倚りかゝりて胡弓をひき始める。西照は立ちながら聴いてゐる。門内より濱津の妻お秀、切髪にて珠数を持ち出て来り、これも無言にて胡弓を聴きすましてゐる。落葉しづかに降る。糸の音は次第に悲しく、西照もお秀も引き入れられたるやうに地にひざまづく。そのうちに、お秀は堪へかねて思はず泣く。この聲に西照はこゝろづきて見かへる。勇吉も胡弓をやめる。)

お秀。とんだ御邪魔をいたして相済みません。あまりに悲しいので思はず聲を立てました。

西照。われ／＼こそ御門前で嘸ぞおやかましいことでもござりましたらう。

お秀。その御挨拶では恐れ入ります。實はわたくしどもにも志す佛がござりますが、その胡弓が済みましたら奥へ通つて御回向を願はれますまいか。

西照。では、もう胡弓は止めませう。

勇吉。(勇吉の顔のをぞく。)あなたは……。進藤さんの御子息ではござりませんか。

勇吉。はい。進藤勇吉でございます。

お秀。わたくしは濱津應輔の家内でございます。見ればお目が御不自由のやうでござりますな。

勇吉。熊本の戦ひで負傷しまして、両方の眼が潰れました。

お秀。(悼ましげに。)それはまあお可哀さうな。して、お母さまは何うなされました。

勇吉。母も熊本で流れ弾にあたりまして……。

お秀。え。お母さまも……。

西照。お母さんは戦死、この勇吉さんは盲目、かさね／＼お氣の毒のことでもござります。西郷さんもひどく可哀さうに思はれて、その後は始終自分の手許に置かれたのでござりますが、日向の長井を立つときに、眼の不自由なものを一緒に連れて行かれないと云ふので、わたくしがお預かり申して別れました。

お秀。さうでござりましたか。

西照。それから此のお子連れまして、一先づ鹿兒島へ戻つてまゐりましたが、こゝも戦争の最中でどうすることも出来ません。その中にたうとう城山も没落しました。

(西照は嘆息する。お秀も涙をふきながら聴いてゐる。)

西照。

せめてその戦場の跡をたづねて、西郷さんは勿論、その他の人々の御回向をいたしたいと、今日かうして参つたのでござります。

お秀。

それは御奇特のことでござります。では、あなたは以前から西郷先生を御存じでござりましたか。

西照。

はい。わたくしの師匠は京の清水寺の月照と申しまして、西郷さんとは深い御縁のある者でござります。

お秀。

お、あなたは月照さんのお弟子でござりましたか。さういふ御縁のあるお方が御回向なされて下さりましたら、西郷先生もさぞお喜びでござりませう。

勇吉。

して、こちらの御主人はどうなされました。

お秀。

主人の應輔も西郷先生のお供をいたしました。

勇吉。

では、やつぱりこゝで……。

お秀。

はい、この廿四日の朝、戦死いたしました。

西照。

それは、それは、なんとも申上様もござりません。さう承はれば猶更のこと、すぐに参つて御回向申しませう。

お秀。

なにぶんお願い申します。

西照。

西郷さんはこの邊で戦死なされたのでござりますな。

お秀。

はい。丁度この門前でござりました。

西照。

左様でござりますか。

(西照はあたりを眺めてゐる。上のかたの奥より西郷隆盛と稱する狂人、木の枝を持ちて傲然として出づ。)

狂人。

どうだ。見る、みる。西郷隆盛は天へ昇つたぞ。

西照。

え。(おどろいて見かへる。)

お秀。

あれは氣狂ひでござります。

狂人。

(空を指さす。) 見ろ。西郷隆盛は天へ昇つて星になつたぞ。

西照。

(おなじく空をみる。) お、星が……。

勇吉。

星が見えますか。

西照。

宵の明星の隣に、長い尾をひいた帚星があざやかに見えます。

お秀。

ほんに大きい帚星が……。あれは何といふ星でござりませう。

城山の月

狂人。

西郷星だ、西郷星だ。

西照。

西郷星……。(かんがへる)進藤さん。

勇吉。

はい。

西照。

西郷さんの魂は、あの高いところに昇つてゐられるのかも知れませんが、わたし達もこゝで拜みます。あなたはその胡弓を弾いて、もう一度お聞かせ申してはどうですか。

勇吉。

さういたしませう。

狂人。

(勇吉は胡弓をとり直す。西照は空を仰いでゐる。) 天を見る。西郷星をみる。

(狂人は木の枝を杖にして傲然として立つ。勇吉は地に坐して再び胡弓をひく。西照とお秀は空を仰いで拜む。うすく水の音きこゆ。)

幕

箕輪の心中

明治四十四年三月作。  
明治四十四年九月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——藤枝外記（市川左團次）吉田五郎三郎（市川小團次）堀部三左衛門（市川左升）百姓十吉（市川壽美藏）仲間角助（市川荒次郎）大菱屋の綾衣（澤村源之助）お縫（阪東秀調）お時（市川蓮女）お米（市川蓮若、後の松蔦）など。

登場人物——藤枝外記。外記の妹お縫。吉田五郎三郎。用人堀部三左衛門。仲間角助。菩提寺の僧。百姓十吉。十吉の母お時。村のむすめお米。大菱屋綾衣。新造綾鶴。若い者喜介。ほかに花見の男女。茶屋娘。眼かつら賣。小坊主。若侍。水屋。燈籠屋。新内語。廓の者。盆唄の娘子供など。

## 第一幕

(1)

向島の木母寺。平舞臺の下手へよせて、葉ぶき屋根の茶店あり。軒にあづま屋といふ行燈をかけ、

笑輪の心中

門口に木振よき柳の立木あり。よきところに床几二脚ほどならべてあり。所々に櫻の立木、花盛りの體なり。正面には木母寺の境内を見る。

(熊藏、半次、職人のこしらへにて、眼かづらをかけて、酒樽を持ち、ほかに娘三人、おなじく花見のこしらへにて、いづれも茶店の床几に腰をかけてゐる。外にも花見の男女大ぜい、思ひくのこしらへにて立ちかゝりゐる。天明五年三月十五日、梅若の供養にて双盤念佛の音きこゆ。)

熊藏。おい、おい。姐さん。茶でも湯でも早くたのむぜ。酔醒めのせるか、喉が渴いてならねえ。半次。ほんたうにこゝらは田舎だぜ。花時にやあ些と氣の利いたのを置けばいゝのに……。おい、おい、姐さん。大急ぎだよ。

茶屋女。はい、はい。

(茶店の中より茶屋女二人は赤い環をかけ、土瓶、茶碗、さくら餅などを盆にのせて持ち出づ。)

女甲。どうもこみ合つて居りますもんですから、ついでに遅くなりました。女乙。まあ、ゆつくりとお休みなすつて下さいまし。熊藏。あんまりゆつくりしていると、日が暮れてしまはあ。なあ、半次。半次。ひと休みしたら、早く梅若へおまゐりをして来よう。

男。それ、お念佛がはじまるぜ。女。早く行きませうよ。

(みなく拾遺詞にて茶を飲む。奥にて双盤の音きこゆ。花見の男女は奥を見る。)

(男女大ぜいはわや／＼云ひながら境内に入る。)

娘一。もうお念佛が始まると云ふから、わたし達も早く行かうぢやありませんか。熊藏。遅えねえ。どれ、出かけべえか。おい、姐さん。お茶代はこゝへ置くよ。女甲。毎度ありがたうございます。

(熊藏と半次は立たんとしてよろ／＼する。)

娘一。あれ、あぶない。娘二。お前さん達は酔つてゐるから氣をつけないと、池へおつこちるよ。半次。おつこちる時にやあお前を抱いて一緒に心中だ。あは／＼／＼。熊藏。こんなものは邪魔でいけねえ。おい、誰か持つてくんねえか。(樽を出す。)

娘三。だつて、こりやあもう空ぢやあないか。熊藏。空でもなんでも、これをさけてゐなくつちやお花見らしくねえや。ついでにこんなものも

其方へ渡さう。

半次。

(熊藏は眼かづらを取る。娘三はうけ取りて眼かづらをかけ、空樽をさげる。)  
おれもこんなものは鬱陶しくていけねえ。(眼かづらを取る。兜も鏝も何つちもいらねえ。みんなそつちへお渡し申すぞ。)

(半次も眼かづらと樽を出す。娘一は眼かづらをかけ、娘二は樽を持つ。)

娘一。

ねえさん。おやかましようございました。

女甲。

どういたしましたして、一向おかまひ申しません。

熊藏。

さあ、行くべえ、行くべえ。

(熊藏を先にみな騒ぎながら境内に入る。)

女甲。

けふは梅若の御供養で朝からお客が絶えないので、息をつく間もありやあしない。

女乙。

ほんたうに今日はがっかりしてしまつた。

女甲。

お花見もこの五六日のところが書き入れだから、忙がしいのも仕方があるまいよ。

(二人は茶碗など片付けてゐる。下手の奥より藤枝の妹お縫、十八歳、旗本の娘のこしらへにて、中間角助をつれて出づ。)

角助。

お嬢様、これで烏渡お休みなされては如何でございます。

(お縫はうなづきて床几にかゝる。)

女甲。

入らつしやいまし。(茶を汲んで出す。)

お縫。

角助。けふは大層な賑ひであるなう。

角助。

御覽の通り、向島も今が花盛りでございますから、江戸中の者がみんな出かけてまゐります。

お縫。

ほんに今は花の盛り、いつもながら見事な眺めではないか。

(女甲は角助にも茶を出す。)

角助。

姐さん、後生だ。おれには櫻湯をくんねえ。

女甲。

はい、はい。

(女は店に入る。お縫はあたりを眺めてゐる。境内よりお時、四十七八歳、農家の女房の拵へにてうろくしながら出て来り、お縫と顔を見あはせる。)

お時。

お、お嬢様ではござりませぬか。

お縫。

お、乳母か。

笑輪の心中

角助。お乳母さん、珍しいところでお出つくはしたね。

お縫。まあ、そこへかけたがよからう。

お時。はい、ありがたうござります。

(お時は床几にかゝりて一禮する。)

お時。此頃はまことに御無沙汰をいたして居ります。して、今日はお花見でござりますか。

お縫。花見といふではないけれど、小梅の御菩提所へまるつた序に、梅若の御供養を拜みに來ました。

お時。實はわたくしも梅若さまへ御參詣に來たのでござりますが、境内の混雑で悴のすがたを見

お縫。うしなひ、そこらを探して居るうちに、丁度よいところでお目にかゝりました。

お時。なに、混雑のなかで悴を見失うたと……。それは心配なことであらう。

お時。いえ、あれも子供では無し、どうやら斯うやら一人前の若い者、別に心配するほどのこと  
もござりませぬ。

角助。おまへの方では心配しなくつても、息子さんの方で、却ておまへを案じてゐるかも知れね  
え。私が行つて一遍さがして來ようか。

お時。いえ、いえ、決してそれには及びませぬ。やがてあとからまゐりませう。

お縫。でも、ゆき違ひになつてはならぬ。角助、境内を一度探して來や。

角助。かしこまりました。

お時。それは御苦勞でござりますな。

角助。では、しばらくお待ちくださりませ。

(角助はお縫に會釋して境内に走り入る。茶店の女は茶碗を持ち出て出づ。)

女甲。おや、御家來さんは……。

お時。御家來さんは今ちよいとあれへまゐりました。そのお湯はわたくしが頂きませう。

(お時は茶碗をうけ取る。女は店に入る。)

お縫。かけ違つて暫らく逢はなんだが、乳母はいつも達者でめでたいなう。

お時。おかけ様でこの通り丈夫でござります。して、殿様はお勤め向きの御首尾もよく、御繁昌

でいらせられますか。

お縫。お前はまだ知るまいが……。兄さまも此頃は、別にお勤めと云うては……。

お時。え、お勤めはござりませぬか。

お縫。 (愁はしげに。) 實は去年の暮に、小普請入りを仰せつけられました。乳母、察してくりやれ。

お時。 (おどろく。) それは、まあ……。なるほどこのお正月、お屋敷へ御年始に出ました時、いつもの春のやうでは無く、なんだか陰気でひつそりしてゐると存じましたが、さう云ふわけ

お縫。 春早々から悪い耳を聞かせたくない、なんにも云はずに隠してゐましたが、さういふ仕儀でお勤めにも出られず、たゞ引籠つてばかり居られます。

お時。 おふくろ様にお乳がないので、わたくしがお屋敷へ御奉公、殿様が七つにおなり遊ばすまでお乳をあけて居りましたが、小さいときから御發明のお生れつきで、武藝學問なに暗か

お縫。 らず、立派に御成人あそばして、ゆくゆくは定めて御出世と、わたくしも陰ながら喜んでをりましたに、お役御免の小普請入りとは、一體どうしたわけでございます。

お時。 さあ、その譯は……。ひとに話せば笑ひ草、乳母ならば共に泣いてもくれよう。兄様は武士にあるまじき廊通ひ、身持放埒の廉によつてお上の首尾をそこねた次第。

お縫。 え、殿さまが廊通ひに……。それは今まで些とも存じませんでした。して、そのお通ひなさる女といふのは……。

お時。 大菱屋の綾衣とかいふ女子……。一昨年からの深い馴染とやら。

お縫。 それはまあ飛んでもない。それにしても、おまへ様をはじめ御親類の方々が、なぜ御意見をなされませぬ。

お時。 幾たび御意見申しても、針ほどの效目もあらばこそ、ますく不しだらが募るばかりで、今は親類も呆れてゐるくらゐ……。

お縫。 (お縫はいよく打調るれば、お時も共に愁ひ顔。)

お時。 それはさぞ御心配でございます。あれほど立派な殿様に、どうしてそんな魔がさしたのやら……。情ないことでございますな。

お縫。 (二人は顔を見あはせて嘆息す。この時境内の方さわがしく、以前の熊蔵と半次はお時のせがれ十吉を引立て出づ。十吉は十八九歳、農家の若者。あとよりお米、十六七歳、村の娘にて、うろくし

熊蔵。 やい、この野郎。なんで俺達に突き當りやあがつたのだ。

半次。 うぬ巾着切りだらう。料簡がならねえぞ。

(ふたりは十吉を小突く。)

十吉。(おどくする。)今この境内で連にはぐれ、うろく探してゐるうちに、向うにばかり氣をとられて、つい粗相をしました。どうぞ勘辨してくださいまし。

熊藏。思だ、思だ。つい粗相で済むと思ふか。

半次。賣る喧嘩ならいつでも買つてやるから、相手になれ。

(お時はこれを見て、割つて入る。)

お時。あゝ、もし、これはわたくしの性、どんな粗相を致したかは知りませぬが、わたくしが代つてお詫をいたします。どうぞ勘辨して遣つてくださりませ。

お米。わたしも共々におわび申します。

熊藏。えゝ、ばゝあや阿魔つちよが口を利いたつて勘辨できるものか。引込んでゐる。

半次。さあ、野郎。どこまでもうぬが相手だ。

(二人は立ちかゝるを、連れの娘等は止める。お米と十吉は途方にくれてゐる。)

お縫。(起ち上る。)あゝ、これ、待ちや。

熊藏。(お縫の顔を見て。)や、藤枝様のお嬢様でございましたか。

半次。この通り酔つて居りますので、とんだ失禮をいたしました。

お縫。それはわたしが知り合の者、粗相は免してやつてはくれまいか。

(熊藏と半次は顔を見あはせる。)

熊藏。へえ、お嬢様のお扱ひなら、わたくし共にも決して否やございません。

お縫。では、料簡してくれるのかえ。

半次。よろしうございますとも……。なあ、熊。

熊藏。別に意趣も遺恨もあるわけぢやあなし、好んで喧嘩をするでもねえ。では、お嬢様。

半次。これで御免くださいまし。

(熊藏、半次は早々に去る。連の娘三人もつゞいて去る。)

お縫。十吉、どこも怪我はなかつたかえ。

十吉。丁度よいところへお嬢様がおいで下すつたので、何事もなく済みました。ありがたうござります。

お縫。あの二人は屋敷へ出入りの職人、ふだんはおとなしい正直者だが、花見の酒に酔うたのであらう。

お時。それでも生酔ひ本性違はずとやらで、お嬢さまのお顔を見ましたら急におとなしくなつて

歸りました。

(角助、境内より出づ。)

角助。

十吉さん、そこにあるか。實は今、境内をひとまはり探して来たのだ。

十吉。

いろ／＼御心配をかけて相済みませんでした。

角助。

なに、お禮にやあ及ばねえ。時にお嬢様、なんだかお天氣がをかしくなつて参りましたから、そろ／＼お歸りになつては如何でございます。

お縫。

番町までは路も遠い、降らぬうちに戻りませう。乳母も十吉もひまを見て、屋敷の方へたづねて来や。

お時。

はい。近いうちに必ずお屋敷へうかゞひます。唯今のお話をうけたまはりましては、わたくしも心配で心配でなりません。

お縫。

あ、これ、くはしいことは又その節……。

(お縫は眼で知らせるに、お時はうなづく。お米は空を仰ぎ見る。)

お米。

お、もうほつ／＼降つて来ました。

十吉。

大したこともあるまいが、これが梅若の涙雨だ。

お縫。

涙の雨はいづこにも……。 (空をみる。)

(この時、雨ますます降り出づるに、みな／＼忙がはしく茶店の軒下に入る。)

(11)

木母寺附近、料理茶屋の入口。舞臺の上手少しくあとへ下げて、風雅なる屋根附の門にむさし屋と記せる行燈をかけたなり。左右は青竹の垣を折りまはし、門内に櫻の立木あり。垣の外、すこしく下手へ寄りて梅の大樹あり。

(以前の娘三人は手拭をかぶり、裳を端折りて、料理茶屋の軒下に立つ。小坊主安念は法衣、朴齒の下駄。眼鬘賣六助はかづらを掛けたる棒を持ち、いづれも梅の木の下に雨宿りをしてゐる。花見の人々濡れながら走り出で、上下へ入る。みな／＼空を見る。)

熊さんや半ちゃんはどこまで行つたんだらうねえ。

娘一。  
娘二。

直そこまで傘を借りに行くと云つたが、まさか置去りした譯でもあるまい。

箕輪の心中

娘三。

あの人達のことだから何とも云へないよ。

六助。

梅若の涙雨が、たうとう本降りになつて来やあがつた。おい、お小僧さん。お前はどこのお寺だえ。

安念。

お寺は駒込吉祥寺でござる。

六助。

え、悪く洒落れるぜ。木母寺か長命寺か。

安念。

木母寺でござる。

六助。

それぢやあ今日の念佛踊りに鉦をかんく叩いた方だね。なにしろ斯う降られちやあ此方の商賣は型なしだ。どうだい。お小僧さん。お前にやあ日和の御祈禱はできねえかね。

安念。

随分祈つて進めるが……。

六助。

慾張つたことを云ひなさんな。今時の坊主は油断がならねえ。

娘一。

雨はだんく強くなるばかりで、なかく止みさうもないねえ。

娘二。

いつそもう濡れて歸らうか。

娘三。

それでももう少し待つて見ようよ。

(上手より以前の熊蔵は番傘をさして出づ。)

熊蔵。

やうくのことと傘を一本工面して来たが、半次の奴はまだ見えねえかね。

娘一。

さつきから待つてゐるんだけど、どこへ行つたか判らないんだよ。

熊蔵。

仕様がねえなあ。だが、いつまでこゝに待つてもゐられめえ。あの野郎は置去りにして出掛けようぜ。お前たち三人はこれをさして行きねえ。

六助。

は、三人の相傘はめづらしい。

熊蔵。

それでも丸つきり無えよりは優しだらう。

娘二。

さうして、お前さんは……。

熊蔵。

おれはすぶ濡れ、どうせ自棄だ。

六助。

女の子にやあ深切だね。

熊蔵。

これでなけりやあ情婦は出来ねえ。さあ、出かけた、出かけた。

六助。

(むすめ三人は捨臺詞にて一つの傘に入り、熊蔵は手拭をかぶりて先に立ち、みなく急ぎ去る。)  
こりやあいつまでも止みさうもねえ。(袴にかけたる眼かづらを外して懐中へおし込む。)  
仕方がねえ、濡れる、濡れる。お日和、お日和。  
(六助も雨のなかを走り去る。)

安念。

だん／＼に人が行つてしまふので、なんだか寂しうなつた。どれ、わしも濡れて行かうか。

(安念はあたりを見まはしてゐる。奥の料理茶屋にて唄ふころにて、端唄模様の獨吟になる。)

唄

あづま路に、あはれを残す梅若の、雨をなみだと誰が云ひし、戀のあはれは虎が雨。

安念。

この茶屋でも何か面白さうに唄うてるな。浮世の凡夫が花に浮かれて、は、馬鹿なことぢや。色即是空……南無阿彌陀佛。なむ阿彌陀佛。

(安念も去る。時の鐘、薄く雨の音きこゆ。)

(門の内より藤枝外記、廿五歳の武士。大菱屋綾衣、廿一二歳の遊女。むさしやと記せる貨衆を相乗にして出づ。あとより新造綾鶴出づ。)

唄

ふりし昔の大磯も、江戸の廓のよし原も、ながれは同じ隅田川、ちり浮く花を友として、

つがひ離れぬ都鳥。

綾鶴。

い、鹽梅に雨も小降りになつたやうでござんすな。

外記。

花時の天氣癖だ。やがて晴れるであらう。

綾衣。

今鳴つたのは七つでござんせうな。

外記。

廓の門限は七つ半。今から歸つたら遅くもあるまい。迎ひの駕籠はまだ見えぬか。

綾衣。

左もない病氣を云ひたてに、お醫者へ行くところしらへて、廓を出たのは今日の午ごろ。ここで主と落ち合つて、花をみながら半日をほんに面白く暮したので、今さら廓へ歸るのは……。

外記。

思だといふのか。慾をいへば限りがない。わしもあとから行くほどに……。

綾衣。

きつと來てくださんすか。

綾鶴。

主にかぎつて嘘はござんすまい。話の残りは今夜のつくり……。

綾衣。

必ずあとから來てくださんせ。

外記。

唄

波のまに／＼吹き分けられて、翼も寒き春のゆふ風。

(駕籠犬四人は駕籠二挺をかつぎて出づ。)

駕甲。

へえ、お待遠さまでございました。

駕乙。

もう一挺はすぐにあとからまゐります。

外記。

お、よい、よい。三人連れ立つては人目もある。わしは一足おくれで行けば、お前達ふたりは先へ歸れ。

箕輪の心中

綾衣。では、待つてゐますぞえ。

綾鶴。だますと堪忍しませぬぞ。

(外記笑ひながら首肯く。綾衣と綾鶴は駕籠に乗りてゆく。雨の音しめやかに、櫻の花はら〜と散りかゝる。外記は傘をさして見送る。綾衣は駕籠の垂簾をあげて、見送る。)

綾衣。六つ半までには屹度でござんすぞ。

(外記は矢はり笑ひながらうなづく。駕籠は遠く走り去る。)

外記。春雨に濡れてゆく女の駕籠に、花のふぶきの散りかゝるは、晝にあるやうな風情だなう。

(外記はうつとりしていつまでも見送る。下のかたより以前の十吉、跣足にて番傘二本をかゝへ、お米と相傘にて走り出づ。)

十吉。殿様ではござりませぬか。

外記。おゝ、十吉。どこへ行く。

十吉。おふくろと一緒に梅若へ参詣に來ましたら、丁度お嬢様にお目にかゝりました。

外記。なに、妹に逢つた……。

十吉。はい。そのうちにこの俄雨で、堤下の親類まで傘を借りに行つてまゐりました。お嬢様は

梅若の茶店で、雨宿りをしておいでなされます。

外記。ここで私に逢つたことを、妹に云ふなよ。

十吉。はい。

外記。誰にも云ふなよ。

(云ひすて、外記は門内に入る。十吉は合點のゆかぬ體にて、しばらくあとを見送る。お米もおづ〜門内をうかゞふ。茶屋の奥にて唄の聲きこゆ。)

幕

# 第二幕

(一)

麴町番町 藤枝外記 (五百石の旗本) の屋敷。二重屋體にて、床の間に鏡櫃を飾り、つゞいて遊ひ

箕輪の心中

欄、襖。庭には飛石、石燈籠、立木。下のかたに枝折戸あり。

(七月十三日の午後。若侍二人、一人は花鉢を持ち、一人は如雨露を持ちて、枝折戸のそばに立ち、四目垣にからみたる朝顔に水をやつてゐる。)

侍 甲。

盆になつても、日中は随分暑いな。

侍 乙。

併しこの朝顔ばかりは、日中に水をやらねばなるまい。

侍 甲。

蔓もおひくゝに伸びて来たから、花もやがて未だらうよ。

(中間角助は文を持ち出て出づ。)

侍 甲。

おゝ、角助。貴様は晝前から些とも影を見せなかつたが、今まで何處をうろついでゐたの

だ。

侍 乙。

貴様はこのごろ兎かく横着でよろしくないぞ。

角 助。

いえ、決して横着といふわけぢやあねえ。殿様のお使で遠くまで行つて来たので……。

(汗をふく。) いや、どうも暑いことだ。

(奥より用人堀部三左衛門、五十餘歳、出づ。)

三 左。

これ、角助。殿様のお使でどちらへ参つた。

角 助。

へえ。(もじ／＼してゐる。)

三 左。

この三左衛門に沙汰無しでまゐるとは……。 (角助の顔を蛇とみる。) さあお使の出さきを確

と申せ。隠すと其分には差置かぬぞ。

角 助。

へえ、實は其……。

三 左。

一體、貴様の手に持つてゐるのは何だ。

角 助。

え、これは……。

(角助はあわて、文をふところ、に隠さうとする。三左衛門は若侍を見かへりて眼で知らずれば、

甲乙二人は心得て立ちかゝり、無理に角助の文を奪ひて、三左衛門に渡す。)

三 左。

上書は女文字で様まゐる。むゝ。(うなづく。) これ、角助。私がこれまでたび／＼申聞かせ

て置いたを忘れたか。たとひ殿様の仰せでも、吉原などへお使にまゐること相成らぬと、

堅く申渡してあるに、さりとほ不届至極の奴。貴様のごとき者が當お屋敷に居つては、殿

様のお身持も直るまい。今日かぎり長の暇をつかはすから、左様心得ろ。

え、お暇になるのでございますか。

三 左。

勿論のことだ。早く出て行け。

箕輪の心中

角助。

こりやあ飛んでもねえことになつたな。(弱つてゐる。)

(奥より外記の妹お縫出づ。)

お縫。

三左衛門、待ちや。角助には少し聞きたいことがある。(若侍等を見かへる。)

甲乙。

はあ。(會釋して去る。)

三左。

(苦り切つて。)嬢様。かやうな者にお詞をおかけ遊ばすな。

お縫。

でも、聞いて置きたいことがある。(角助にむかひ。)

角助。

なんとも思はぬどころぢやございませぬ。實に大弱りでございます。以後は屹と慎みますから、今度のところだけは御勘辨を……。なにぶん願ひ申します。

お縫。

詫びるならば、勘辨してもあけようが、その代りにわたしが今たづねることを包み隠さず

角助。

へい、へい。もう斯うなれば一から十まで、なんでも根こそけ申上げます。

お縫。

お兄様が三年越し馴染んでおいでなさる吉原の遊女、大菱屋の綾衣とかいふのは何のやう

な女子かえ。

角助。

わたくしも度々お供をして存じて居りますが、その綾衣といふ花魁は實に豪勢なものでございませぬ。年のころは廿一二、容貌はよし、姿は好し、氣前はよし、なにしろ入山形に二つ星の仲の町張りで……。あなた方は御承知でございますまいが、一體仲の町張りと申しますと……。

三左。

え、詰らぬことをべら〜饒舌るな。おたづねのことだけを手みじかに申上げればよいのだ。

お縫。

して、お兄様はその綾衣のところへばかりお通ひなさるのか。

角助。

へい。殿様はその花魁一點張り、また女の方でも殿さま一點張り、ほかの客は振向いても見ないといふ逆上方で、廊内では大評判でございます。併しあのくらゐの女に首つた惚れられるといふのは男冥利で、殿様もよく〜好い月日の下にお生れなすつたのでございませう。實にお羨ましいこと……。

三左。

たはけめ、云はして置けばさま〜の囁語を申す。嬢様、もうおやめなされませ。

お縫。

まあ、待ちや。それほど噂を立てられては、綾衣とやらも稼業はなるまいに、今も相變ら

箕輪の心中

す勤めてゐるのかえ。

角助。 さあ、さういふわけでございますから、ほかの客は寄り附かず、自然女の方にも借金は殖える、殿さまの方にも御無理が出来るといふやうな理窟で、詰り詰つた擧句の果、實を申せば……(措寄つて聲をひくめ。) 花魁は先月の晦日に店をかけ出して、箕輪の御乳母さんのところへ……。

お縫。 なに、綾衣は吉原をぬけ出して、箕輪の乳母のところへ隠れてゐるとか。

三左。 それはいよく、以ての外。年來御恩をきて居りながら、かやうな時に御意見のひと言も申上けることか、却て墮落の女を隠まうなどは、言語道斷、憎い奴。手前これより箕輪へまかり越して、乳母めをきびしく折檻し、一刻も早くその女を追ひ拂はねば、殿様お爲に相成りませぬ。角助、案内いたせ。

(三左衛門は押取刀にて起たんとするを、お縫は止める。)

お縫。 はて、急ぐには及ばぬ。さう事が判つたからは、市ヶ谷の叔父様とも御相談して、また分別の仕様もあらう。

三左。 なるほど。市ヶ谷の殿様にも豫て御心配をねがつて居りますれば、一應御相談をいたした

角助。 方がよろしいかも知れませぬ。では、角助。もうよいから、行け、行け。

お縫。 へい、へい。もう御用はございませぬか。

角助。 部屋へさがつて休息したがよい。

へい、へい。

(角助はほつとして立去る。あとに兩人は顔を見合わせる。)

三左。 嬢様、いよく、事面倒に相成りましたな。

お縫。 ほんに困つたもの。お兄様がそれほどに御執心なら、また取計ひの仕様もあらうけれど、なにをいふにも相手が勤めの女ではなう。

三左。 左様でござりますとも……。町人でも筋目正しい家では、吉原の女子などは門端も踏ませませぬ。まして天下の御旗本が、くらべにもならぬ御身分違ひ、とても、とても。(頭をふる。)

お縫。 さあ、あまり身分が違ふので、たとひわたし達は承知しても親類大勢が承知しまい。

三左。 よし又、御親類が承知なされても、世間一統が承知しませぬ。第一にお家の汚れ、御先祖様へ相済みませぬ。

(お縫も思案にくれてゐる。奥より藤枝外記出づ。)

お縫 お、お兄様……)

外記 角助はまだ戻らぬか。

お縫 え。(三左衛門の顔をみる。)

三左 角助は唯今戻りました。

外記 お、戻つたか。定めて返事を持参したであらう。これへ出せ。これへ出せ。

三左 いえ、これは差上げられませぬ。

外記 なに、渡されぬ……)

三左 かやうなものを御覽に入れては、お前さまお爲に相成りませぬ。

(三左衛門は先刻の文を取つてすたくくに引裂き捨つ。外記は赫となりしが、また思ひ返して冷笑ふ。)

外記

さて、そちは忠義者だ。文の通ひ路に關を据ゑても、こゝろと心との通ひ路は塞がれまい。貴様達の小才覺で、燃える火を消さうとするのは、あれ、あの庭の燒石に如雨露の水をそぐやうなものだ。止せ、よせ。時に三左衛門、すこしく金子入用だが、知行所から取

り立つる工夫はないか。

三左

いかに御自分の御知行所でも、定めほかに無體の御用金など怪しからぬ儀でござります。では、藏の中から不用の鎧かぶと太刀など持出して、賣拂つてはどうだな。

外記

鎧兜太刀などは武士の表道具、まして御先祖傳來の大切なる品々、おまへ様の御自由には

三左

相成りませぬ。

(三左衛門頷として應ぜず。外記はいよく勃然として、床にかざりし鎧櫃より一領の卯花織の鎧を取り出して来る。)

外記

これ、三左衛門。わしが今この鎧を持ち出して、勝手に賣拂つたらなんとする。

三左

いえ、唯今も申す通り、おまへ様のお持物でも、お前様御勝手には相成りませぬ。御先祖様が慶長元和度々の戰場に、敵の血を瀧いだるその鎧、申さばお身にもかへがたき寶、藤枝五百石のお家はその鎧と太刀の功名故でござりまするぞ。

お縫

今あらためて申さずとも、鎧刀は武士のたましひといふことを御存じないか。いかにお心が狂へばとて、重代の寶をむざく手放さうとは、あまりにお情なう存じます。

外記

慶長元和の血なまぐさい世の中と、太平百餘年の今日とは、世もらがへば人の心もちがふ

箕輪の心中

ぞ。鎧刀を武士の魂などと、自慢した時代はもう過ぎた。わしも以前は武藝に凝り固まつて、やれ劍術の柔術のと、油汗をながして苦んだものだが、今更おもへば馬鹿であつた。歴々の武士が竹刀の持様も知らず、弓の引様もしらず、武藝よりも遊藝に身をいれて、小唄や三味線の稽古に餘念もない。それでも立派にお役をつとめて、家繁昌する世のなかに、なんの用もない鎧刀、五月人形の飾り具足や菖蒲刀も同様だ。家重代の實でも、好い値に引取るものがあれば、なん時でも賣放すぞ。

(鎧を投げ出せば、二人はあきれて顔を見あはせる。)

三左。いかにも此頃の御旗本御家人が、武藝をすて、遊藝に耽り、次第に懦弱に流れまするは、なげかほしい儀でござりますが、他は他、われは我、さやうな徒にはおかまひなく、お前様は飽までも御先祖以来の御家風によつて……。

え、くどい。野暮を申すな。先祖の講釋も聞き飽きたぞ。

侍 甲。(顔をそむけて取合はぬに、兩人はたゞ嘆息のほか無し。奥より先刻の若侍一人出づ。) 申上げます。

外記。なんだ。

侍 甲。市ヶ谷の殿様お越しにござります。

お 縫。お、叔父様がお見えなされたか。

三左。すぐにこれへお通し申せ。

(二人は好いところへ叔父が来てくれたと喜ぶ。外記は顔をしかめる。)

外記。いや、叔父に逢ふも面倒……。外記今日は所勞でござるとお断り申せ。

三左。いや、いや、餘人とは違つて市ヶ谷の殿様、お逢ひなさらねば濟みますまい。

外記。え、かまはぬ。逢へぬと云へ。

お 縫。いえ、いえ、さうはなりませんまい。

(たがひに争ふうちに外記の叔父吉田五郎三郎、四十前後、おなじく旗本の袴、羽織にて奥より出づ。かくと見るより、お縫はあわて、鎧を片附ける。)

三左。これは、これは、お出迎へも致しません……。

五郎。いや、いや、始終出入りをする屋敷だ。案内も待たずに通つて来た。

お 縫。叔父様、ようおいでなされました。

五郎。きびしい残暑だ。一同變ることもないか。

其輪の心中

お縫。はい。

三左。これ、早うお茶の支度いたせ。

侍甲。はあ。(引返して去る。)

外記。その後はまことに御無沙汰をいたして居ります。

五郎。御用が忙がしければ自然無沙汰になる、それはお互ひのことだ。わしもこの間は御用繁多

であつたが、幸ひ今日は非番。と申して、屋敷にたゞ子然として居つても退屈だから、久

振りで一勝負しようかと、この暑いのに出かけてまゐつた。どうだ、外記、このごろは少

し強くなつたかな。三左衛門、盤を持って。

三左。はあ。

(三左衛門は起つて、違ひ棚より碁盤を持出づ。外記は氣のすゝまぬ顔。)

外記。わたくしは此頃しばらく盤にむかひませぬので、とても叔父様の御相手は出来ませぬ。ど

うか今日は御免を……。

五郎。む、見れば顔色もよくないやうだが、氣分でもすぐれぬか。

外記。別に病氣と申すでもござりませんが……。

五郎。

病氣でなくば一局まるれ。却つて暑さを忘るゝものだ。

(盤にむかひて石を取る。外記もよんどころなしに石を取る。)

五郎。お縫も三左衛門も圍碁は不得手であつたな。嫌ひなものを見物してゐるのも大儀、又こち

らも傍に人が居つては氣が散つてならぬ。用があれば呼ぶほどに、遠慮なく次へ立て。

お縫。では、お詞にしたがひまして。

三左。暫時お次へさがります。

(お縫と三左衛門は會釋して奥に入る。)

五郎。さあ、ほかに人も居らぬ。ゆるくと勝負せうか。

(二人は盤にむかひて石を打つ。)

五郎。これ、なにをうかく致して居る。身にしみて打たねば面白くないぞ。

外記。はあ。

五郎。これは大分暑くなつてまゐつた。

(羽織をぬいで又打つ。外記はじめは氣の乗らぬ體なりしが、しだいに釣込まれて打つ。)

外記。(やがてあわたしく。)や、叔父様。それでは違ひます。

五郎。

なにが違ふ……。

外記。

お前様のこの石はもう死んで居ります。

五郎。

馬鹿を申せ。なんでこれが死ぬものか。

外記。

でも、これは……。

五郎。

え、卑怯なことを申すな。

外記。

負腹を立つおまへ様こそ、近頃御卑怯でござりますぞ。(あざ笑ふ)

五郎。

やあ、卑怯とはなにが卑怯……。今の一言聞き捨てならぬぞ。これ、この石はかう切つたのだ。

(五郎三郎は不意に傍におきたる刀を取つて、ぬき撃に斬りつくる。外記は身をかはして基石をうち付ける。五郎三郎透さず斬り込むを、外記に二三度掻いくぐり、碁盤をとつて受止むる。お縫と三左衛門は奥より走り出づ。)

お縫。

これはまあ何うなされたのでござります。

三左。

先づくお鎖まり下さりませ。

(二人は割つて入る。)

外記。

いや、騒ぐには及ばぬ。叔父さまが負腹を立たれたのだ。叔父甥が内輪同士の勝負に、一目二目のあらそひから、理不盡の刃傷沙汰は、日ごろの叔父様にも似合はぬこと。兎かくに賭事勝負ごとは人を氣狂ひにするものだなう。

五郎。

これ、外記。賭事勝負ごとは人を氣ちがひにすると知りながら、遊女ぐるひは人を氣狂ひにするとは氣がつかぬか。よし原がよひに現をぬかして、三年越しの身持放埒、この叔父が陰になりひなたになり、隠しても庇つてももう及ばぬ。すでに舊冬は小普譜入り仰せつけられ、すこしは眼も醒むるかと思ひの外、ますく亂行募る趣、頭支配の耳にも入つて、ひと間住居を申付けらるゝか、あるひは甲府勝手をいひ渡されうも知れぬと、組中でも専ら噂する。かくては家の恥、親類縁者の恥、所詮このまゝには捨ておかれぬ奴。圍碁の争ひにことよせて、たゞ一刀に斬つて捨て、表向きは頓死と披露して、妹に然るべき橋をとれば、世間に恥もあらはれず、藤枝の家に疵もつくまい。

お縫。

では、叔父様は最初から巧んだこととござりましたか。

五郎。

おゝ、はじめから仕組んだ今の口論。分別さかりの武士が理不盡の刃物三昧、おとなけな位と思ふなよ。覺悟はして來ても、人のこゝろは弱いもの、現在の甥を切らうとする腕は

眞輪の心中

鈍つて、撃ち損じたが残念だわえ。さあ、外記。この上は詰腹……。尋常に切腹いたせ。叔父が介錯してやるぞ。

外記。お詞ではござりますが、外記は命が惜うござります。御手討も切腹もまつびら御免……。なに、命が惜いと……。かへすくも卑怯な奴……。その儀ならば……。

(また抜きかゝるを、お縫と三左衛門は遮る。)

お縫。叔父様が日ごろの御氣質では、御無理もないこととござりますが、たとひ座敷牢でも甲府詰でも、お命にさへ障りがなければ、また御出世の時節がないとも限りますまい。嬢様のおつしやる通り、お家のおためとは申しながら、甥の殿をむざ／＼御手討の詰腹のとは、憚りながら餘りにむごい御沙汰。この儀ばかりは三左衛門、いくへにも御勘辨をねがひ上げます。 (更に外記にむかひて。)

もし、殿様。叔父さまが今のおことばを、なんとお聞きなされました。先刻も御自分で仰せられました通り、御幼少の時から武藝がお好きで、弓馬劍術柔術まで皆それ／＼に免許のお腕前、現に今も叔父様が不意討の切先を見ごと受止めたほどではござりませぬか。その武藝をお役に立て、神妙に御奉公あそばせば、御出世は眼のあたりでござりませうぞ。

お縫。それには心を入れ替へて、よし原の女子のことなどふつゝい思ひ切つてくださりませ。

(外記答へず。)

五郎。お縫も三左衛門も兎かう申すな。下世話にいふ馬の耳に念佛、なにを云つても無駄なことだぞ。

でもござりませうが、今日のところは何分御勘辨をねがひます。

お縫。穩便の御沙汰をおねがひ申します。

三左。其方達がそれほど申すならば、けふはこのまゝ立歸らうが、この後も改心せぬに於ては藤枝の家には代へられぬ。きつと仕置をせねばならぬぞ。外記、すこしでも武士の性根があらば、よく分別してみろ。

(五郎三郎は起ちあがる。お縫はうしろより羽織を被せる。)

五郎。(羽織の紐をむすびながら) 慶長元和の合戦には、武名をあげたる藤枝の家も、太平二百年の後はかゝる腰ぬけを産み出して、三河武士の血も次第に濁れてゆくは、人の罪か、世の罪か。(お縫等と顔を見あはせる。實に残念な儀だなう。)

(嘆息しつゝ、奥に入る。お縫と三左衛門は送りにゆく。外記はあとを見送りに獨言。)

外記。

命が惜いと申したら、むかし氣質の叔父様は、ひとかたならぬ御立腹であつたが、家の爲や親類縁者のために、命を捨てろといふのは無理な註文。自分の命は自分のもの、人のためになんて死なうぞ。外記の命も自分の爲なら、なん時でも見事に捨て、見せるわ。  
(時の鐘きいゆ。)

(11)

藤枝屋敷の門前。正面は屋根つきの門。左右は板羽目にて、武家の長屋窓あり。

(燈籠屋は盆燈籠の荷をおろして、駒寄の石に腰をかけ、水屋は障子屋根の屋臺を卸して立つ。)

燈籠屋。

どうですね、水屋さん。かう暑くつちやあお前さんなどは大當りだらうね。

水屋。

いや、なか／＼さうは行きませんよ。それに此邊は掘井戸が多いから、水屋は一向御用なしさ。

燈籠屋。

わたしの商賣なんども、けふを過ぎちやあ、もうおしまひだ。なにしろ際物は壽命が短い

からねえ。

水屋。

おたがひに樂は出来ませんよ。日の暮れないうちに、もう些と廻つて來ませう。

燈籠屋。

まあお稼ぎなさい。

(兩人は挨拶して荷をかつぐ。)

水屋。

さあ、さあ、水あがらんか。汲立あがらんか。冷つこい。

燈籠屋。

燈籠や……燈籠……。

(たがひに呼びながら左右に別れゆく。門内より吉田五郎三郎は草履取一人をつれて出づ。お縫と

三左衛門は送り出づ。)

五郎。

唯今も申聞かせた通りの次第であれば、外記の身に就てはそち達もよく氣をつけねばならぬぞ。魂のぬけた奴、どのやうな曲事を仕出さうも知れぬ。もし思案に能はぬことあら

ば、早速に私まで知らせてまわれ。よいか。

委細心得てござります。

三左。

この上ともに何分よろしく願ひます。

お縫。

この上ともに何分よろしく願ひます。

五郎。

む、おのれの心ひとつで、一家一門家來にまで苦勞をかける。困つた奴だ。

其輪の心中。

(五郎三郎は草履取をつれて去る。お縫等はあとを見送る。ゆふ鴉の聲。門内より外記は帷子、お縫にて出づ。斯くと見るよりお縫と三左衛門は左右に立塞がる。)

お兄様。どこへお出でなされます。

どこへ行かうと餘計な詮議だ。

お父様の御意見がまだおわかりにはなりませんか。先づ當分は御謹慎……。(外記の袂をとらへる。)

(屹となる。) 謹慎とは誰の指圖だ。おれはおれの料簡次第で、どこへでも勝手に行くぞ。

外記。

馬鹿め。

(云ひ捨て、つか／＼行かんとす。お縫はその袂に縋りとどむるを、外記はまた振切つて足早に去る。お縫と三左衛門は顔を見あはせて嘆息す。以前の燈籠賣が引返して再びゆき過ぐ。ゆふ鴉の聲。悲し。)

幕

### 第三幕

(一)

箕輪在の農家。藁ぶき屋根、竹縁の二重屋體にて、上のかた佛壇、その下に押入れあり。つゞいて破れたる障子、破れたる壁。上のかたの竹窓の外は蓮池にて、庭より奥へかけて一面に紅白の蓮の花さけり。下のかたには丸太の門口、そこには柳の大樹立てり。田畑をへだて、吉原の廓遠くみゆ。(おなじく七月十三日の午後、佛壇には精霊棚をしつらへ、軒には大いなる切子燈籠をかけたなり。一人の僧は佛壇の前に坐して、佛經を讀む。この家の母お時は下のかたに坐して蚊いぶした嫌がる。いづこよりとも知らず、題目太鼓の音きれ／＼にきこゆ。僧は經をよみ終りて、こなたへ向き直る。)

御回向相濟みました。

お時。

ありがたうござりました。當年はきつい残暑でござりますな。今日は朝から湯島神田下谷浅草の檀家を七八軒、それから廓を五六軒まはつて來ましたが、なか／＼暑いことござつた。

箕輪の心中

お時。

殊にこの邊は晝間でも蚊蚊が多いので、なほく／＼困り切ります。

十吉。

（お時は蚊いぶした煽ぐ。奥よりお時のせがれ十吉は盆に土瓶と茶碗をのせて出づ。）  
和尚様、お茶を一つおあがりなさいまし。

僧。

いやもうお構ひくださるな。十吉どのもいつの間にか立派な若い衆になられましたなう。昨年親父がなくなりましてからは、これ一人が杖柱でござります。

お時。

いや、いや、もう御安心ぢや。十吉どの、そのうちに私がよい嫁御をお世話ませうぞ。

僧。

はい、その嫁は……。

お時。

（云ひかけるを、十吉はきまり悪き體にて、云ふなと制す。）

僧。

では、もうきまつてござるのか。は、う、う、う。それならば猶々御安心ぢや。いや、これは飛んだ長話。どれお暇いたさうか。

お時。

まことにお恥かしうござりますが……。（盆に乗せたる布施のつゝみを出す。）  
折角のおこゝろざし頂戴しまする。

僧。

（僧は布施をとりて懐中し、下駄をはきながら、上のかたを見かへる。）

僧。

おゝ、蓮が見事に開きましたな。いつもながら此邊は閑靜で好うござるなう。

お時。

お寺の御近所にくらべますと、こゝらはまるで田舎でござります。

僧。

いや、田舎が結構ぢや。では、御免ください。

二人。

ありがとうございました。

お時。

（僧は挨拶して去る。母子はあとを見送る。）

お時。

いつも氣輕な和尚様だなう。

お時。

あの蓮の花を大層褒めてるなされたから、後にお寺まるりに行くときに、折つて行つてあげようか。

お時。

おゝ、それがよい、それがよい。

お時。

（母子は話しながらあたりを片附ける。近所の娘子供大勢が手をひかれて出づ。）

お時。

ほん／＼盆はけふ明日ばかり、あしたは嫁のしをれ草。

お時。

（子供等は盆唄をうたひながら行き過ぎる。お時は表をみる。）

お時。

盆踊はこのごろ廢つたが、唄は相變らず賑かいなう。

十吉。

朝からのべつに唄つてゐるやうだね。

お時。

（子供等の唄の聲遠くきこゆ。）

唄 君と寢やろか、五千石取るか。なんの五千石、君と寢よ。

十吉。又あんな唄をうたつてゐる。もう好加減によせば可いに……。わしはあれを聴く度になんだかひやくくしてならぬ。はじめは廓で唄ひ出したのださうだが、今ではこゝら一面に流やつて来た。

お時。

こゝらでは幾ら流行つても構はぬが、お江戸のまんなかへだん／＼に擴まつたら、殿様の御身分にもかゝはること。あんな流行唄は早くやめて貰ひたいものだ。(嘆息して) おゝ、やがて日がくれる。どれ、行水の湯でも沸して置かうか。これ、十吉。その蚊いぶしを断やさぬやうに氣をつけておくれよ。

十吉。

あい、あい。

(お時は奥に入る。蛙の聲きこゆ。十吉は蚊いぶしを編ぐ。村の娘お米、浴衣にて出で、内を窺ひてつか／＼入り来る。)

お米。

十さん。

十吉。

おゝ、お米さんか。

お米。

おふくろさんは……

十吉。

おふくろは奥にゐるが、なんぞ用かえ。

お米。

いえ、おふくろさんよりもお前に聞きたいことがあつて……。

十吉。

あらたまつて私に聞きたい事は……。

お米。

ほかでもないが、この頃お前の家に来てゐる美しい女の人、あれはお前のお嫁さんかえ。

十吉。

飛んでもないことを……。 (奥を見かへる) あれはそんな人ではない。第一にわしとは年が

違ふものを……。

お米。

年が違つとて、年上の女房を持つ人も、世間には澤山ある。ましてあのやうな美しい人だ

もの……。

十吉。

それはお前の邪推といふもの。あのお人はよんどころない譯があつて、さるお方からあつ

かつてゐるのだ。

お米。

いえ、いえ、それは嘘であらう。わたしをだまして何時の間にか、あんな美しい嫁御を貰

つたに相違ない。(泣く。)

十吉。

(迷惑する) お前とわしとは、表向きの祝言こそせぬけれど、兩方の親たちも承知の上で、

末は夫婦ときまつてゐる仲だ。なんでほかの嫁などを貰ふものか。積つてみても知れたこ

とではないか。

お米。そんならあれは何ういふ人で、どこの誰からあづかつたか、はつきり云つて聞かして下さい。(詰寄る。)

十吉。さあ、其人は……。(奥を憚る。)

お米。それは云はれまい、云はれぬ筈。(涙をぬぐふ。)おまへは一昨年から三年越し、よくもくわたくしをだましてゐた。恨は屹と……。覚えてゐるがい。

(お米は持つたる手拭を十吉に打ちつけ、蓮池へ走りゆきて飛び入らんとす。十吉は縁より飛び下りて抱きとめる。)

十吉。あゝ、これ、途方もないことを……。まあ、待つた、待つた。

お米。いゝえ、放して、殺して……。

(二人は争ふ折柄、奥の障子をあけて、大菱屋の綾衣、素人風にこしらへて出て、斯くと見るよりこれも駆け出でてお米を支へ、十吉と共にとの縁先へひき戻す。お米は泣き伏す。)

綾衣。十さん、この見は……。

(きまり懸げに。これはお米といふ近所の娘で……)

綾衣。

(鷹揚に)もし、お米さんといふお見、泣くことも怒ることもなんにもない。わたしはこの十さんのお嫁になるやうな人ではなく、かう見えてもほかに立派な男がある。お前のうたがひを晴すために、なにも彼も云つて聞かせるが、このごろ流行るあの小唄……君と寢やろか五千石とろか、なんの五千石君と寢よ……と、廊はもとより此のあたりまで、人に歌はれるのは妾のことでござんすぞ。

お米。え。

綾衣。相手のお人は五百石、それを五千石と云ひふらすは、尾鯖をそへた世間の噂。兎にも角にもそれほどの深い男を有つた妾が、今更よそのお嫁になられた義理か。もし、わかつたかえ。

(お米の顔を見る。お米はやうやく首肯く。)

十吉。もう斯うなれば隠さずにいふが、お前もかねて知つてゐる通り、家のおふくろがむかし御奉公をした番町の御屋敷の殿様のおたのみで、この間からおあづかり申してゐる此のお人、わしの嫁などとは思ひも寄らぬことだ。

お米。(やうく涙をぬぐふ。)そんならさうと最初から明してくれれば、わたしも心配はしまいよ

其輪の心中

のを、隠さるゝほど疑ふは女の習……。(綾衣にむかひ)もし、おまへ様、堪忍してくださ  
りませ。

綾衣。なんの詫ることがあらう。うたがひが晴れたらわたしも嬉しい。お前さんは十さんと約束  
がある様子、おたがひに仲よく暮しなさんせ。

お米。はい。

(恥かしげに俯向く。綾衣はふたりの顔をちつと見くらべる。)

綾衣。おまへさん達は羨ましい。たとひ薬賣屋根の下で、人に知られず一生を送つても、好いた  
同士が添ひとぐれば、世に生きてゐる甲斐がある。賣りものに花の綺羅をかざり、松の位  
の君達と、世に全盛をうたはれても、その身の果はなんとならう。人には運不運があるも  
のでござんすな。

(二人はその意を解し兼ねて顔を見あはせてゐる。奥よりお時出づ。)

お時。これ、十吉。闇くならぬうちに、お寺へお迎ひに行つてはどうだの。

綾衣。ほんにけふはお盆の十三日……。(考へて)お寺はどこでござんすえ。  
十吉。上野の傍ですから、さのみ遠くもございませぬ。

お米。わたしも一緒に行きませうか。

お時。では、わたしの代りに拜んで来てくだされ。

(十吉は池のほとりへ行って、花を折り取る。)

十吉。阿母さん、このくらゐでよからうか。

お時。お、それでよからう。もつと御入用だとおつしやつたら、又持つて行つてあけるが可い。

綾衣。憚りながらわたしにも其花を序に折つてくださんせぬか。

十吉。あい、あい。

(十吉は白蓮の花四五本を折りて綾衣にわたせば、綾衣は會釋して手に取る。)

綾衣。花のなかでも白蓮は、氣高い美しい花でござんすな。(つくづく眺めてゐる。)

十吉。では、阿母さん。

お米。行つてまゐります。

お時。歸りには日が暮れるであらう。氣をつけて来るが可いぞ。

(十吉は蓮の花を持ち、お米と連立ちて出てゆく。綾衣はあとを見送る。)

綾衣。あのふたりは仲が好ささうでござんすな。

お時。

どつちもまだ子供で一向に埒がござりませぬ。(云ひつゝあたりを見かへる)時に綾様、お前さまに些とお話し申したいことがござりますが……。

綾衣。

それは又あらたまつて何でござんすえ。

(綾衣は竹縁の端に置きたる手桶に蓮の花をばさみて、座にかへる。)

お時。

お前様とはまだ昨今のおなじみで、委しいお話もしませなんだが、わたくしはその昔番町のお屋敷に御奉公して、藤枝の殿様にはお乳をあけた者、その御縁で今日まで相變らずお出入をするうちに、三年前から殿様とおまへ様とは深い仲、詰り詰つて廓をぬけ出し、差當りはわたくしの家に隠まつてくれとのお頼みで、この月はじめからお世話いたして居りますが、それがために殿様のお身に難儀のかゝることを、お前さまは御存じか。

綾衣。

それは疾うから知つてゐます。廓通ひが度かさなつて、自然お上の首尾をそこね、小普請入りを仰せ付けられたと、いつぞや主からも聞きました。

お時。

さあ、その小普請入りは去年の暮、それでも行跡が直らぬとあつて、親類縁者の方々が御相談の上で近々に座敷牢とかいふ噂、その矢先へ今度のことがきこえたら、どのやうな大事が出来しようかと、それが案じられて此頃は、夜の目も碌に合はぬくらゐ……。なにを

いふにも五百石のお家にかゝはること……。おまへ様、察してくださいませ。(涙を含みて掻き口説く。)

綾衣。

では、わたしがいつまでも附き纏うては、主の難儀となるによつて、切れてくれろとでも云はんすのか。

お時。

申しにくい事ではござるが、もし聞きわけて、廓へ戻つてくださればなう。

綾衣。

ほゝゝゝ。なるほどお前のころでは、五百石のお家が大事であらうが、主とわたしの戀を唄うた此ごろの流行唄を、お前はなんと聞きなさんした。なんの五千石君とねよ……。五百石や千石はおはぐろ溝へ流す白粉の水もおなじこと、百萬石でも買はれぬは、廓の女のまことでござんす。

(お時はあきれて其顔を見る。)

綾衣。

(いよく誇りがに)それほど尊い女の誠を五百石で買ったとおもへば、廉いものではござんせぬか。おたがひに惚れたが因果、あすが日どのやうなことがあつても、わたしを恨んでくださんすな。

お時。

では、殿様のお命にかゝはるやうなことがあつても……。

箕輪の心中

綾衣。

殿様が死ねばわたしも死ぬまでのこと。殿様が斯うなつたはわたしの爲、わたしが斯うなつたも殿様の爲、云は、兩方が五分五分で、秤にかけたら重い軽いはござんすまい。わたし一人が悪いやうに思はんすは、あんまり身勝手にござんせうぞ。

綾衣。

（云ひまわられてお時は取付く鳥もなく、唯うつむきて黙然としてゐる。浅草寺の鐘の聲きこゆ。）今鳴つたのは浅草の暮六つ……。おふくろさん、行水のお湯は沸きましたか。

お時。

おゝ、すつかり忘れてゐましたが、お湯は疾うに沸いてをります。殊にお前様は世をしのぶお身の上、あまり端近に長居しては……。

綾衣。

では、暑さを洗ふ行水に、からだを淨めて來ませうか。

（綾衣は起つて奥に入る。）

お時。

よし原の花魁といふものは、さてく、權高で意地の強いもの。今のおそろしい劍幕では、いくら妾が氣を揉んでも、殿さまと手を切つて、廊へ歸るなどは思ひもよらぬ。あゝ、困つたものだなう。（思案に暮れつゝ表をみる。）おゝ、いつの間にか日が暮れた。どれ、お迎ひ火でも焚きませうか。

（お時は奥より焙烙に學がらを入れたるを持ち來りて門に出で、籠をうちて迎ひ火を焚き、またその火を燈籠に移す。芋殻やうやく燃えあがれば、お時は火にむかひて拜む。蟲の聲きこゆ。藤枝外記、忍びやかに出で來り、迎ひ火の煙のなかに立つ。お時は透しみる。）

お時。

おゝ、殿様……。お召物が白いので、わたくしは幽霊かと思ひました。

外記。

いや、幽霊かも知れぬよ。たましひは生きてゐても、からだは已に死んでゐる外記だ。むかひ火の煙に迷つて來た。（さびしく打笑みつゝ内に入る。）

お時。

ほかに誰も居りませぬ。御遠慮なく、さあお通り遊ばしませ。

（外記はうなづきて縁にあがる。お時は手桶の水にて迎ひ火を消して、おなじく内に入る。）

お時。

どうもひどい蚊蚊でござります。（團扇にて煽ぐ。）

外記。

いや、構ふな、構ふな。（白扇をひらきて遣ひながら。）さて、乳母。このたびは彼女のことい

お時。

就て、いろく厄介に相成るなう。その御挨拶では痛み入ります。何分にもこの通りの手狭といひ、親ひとり子ひとりの無

外記。

でござりますので、一向にお世話も行きとゞきませぬ。時に十吉は留守かな。

お時。

はい。夕方からお寺まるりに出ましてござります。

外記。先度まるつた節にも牛僧留守、兎角にかけ違つてしばらく逢はぬが、別に變つたこともないか。

お時。おかけさまで達者で居ります。

外記。それは重疊。十吉とわしとは乳兄弟、達者と聞けば嬉しいぞ。

お時。ありがたうござります。

綾衣。(奥より綾衣、行水をつかひて夕化粧美しく、衣服も着かへて出て、嬉しげに外記のそばに坐る。)よく来ておくんなんしたね。ほゝゝゝ、隠さうとしても廓の訛りがつい出てならぬ。堪忍してくださいませ。

外記。いや、その廓訛りが面白いのだ。併しこゝに忍んでゐることは誰も心付くまいな。

綾衣。燈臺下暗しとやらで、こゝとは流石に氣が注がないやうでござんす。

お時。おゝ、暗くなつたのに、まだ行燈も點さずに……。唯今持つてまゐります。

(お時はその場を外す心にて奥に入る。)

綾衣。もし、さつきの文を見て下さんしたか。

外記。いや、まだ見ぬ先に破られた。

綾衣。破いたとは……誰が……。

外記。家來の三左衛門めが、横合から取上げてすたくゝに引裂いてしまつた。憎い奴めが……。さして大事の文ではなけれど、引裂いてしまふとはあんまりな……。では、御家來衆まで

綾衣。が、文の通路の邪魔をするのでござんすか。

外記。おゝ、家來は勿論、をぢも妹も親類一門、寄つて集つてふたりの仲を裂かうとする。四方八方みな敵だ。

綾衣。なるほどさうでござんせうな。主はいよく座敷牢へ入れられるとか聞きましたが、そんなことがござんすのかえ。

外記。むゝ、無いともかぎらぬ。三年越しおまへに馴染んで、廓通ひの數かさなれば、勤向きの首尾もよろしからず、親類共も心配して、やれ詰腹の、座敷牢のと、なにか頻りに騒いでゐる。事によると、支配頭よりの沙汰として甲府詰を申渡されうも知れぬ。して、そのやうなことを誰から聞いた。

綾衣。こゝのおふくろさんから聞きました。

外記。それに就て乳母はなんと云つてゐた。

綾衣。外記。

心配で夜の目も碌にあはぬくらると……。

それほどまでに心配してくるゝか。外記が七つになるまで手鹽にかけ、生みの子のやうに可愛がつてくれた乳母だ。わしのよくない評判を聞いては、案じるも無理ではない。しかし今更案じたとてなんとならう。兎かく世のなかは面白く暮すが得ではないか。いや、面白いと云へば、いつもは手に取るやうにきこえる廓の騒唄が、今夜は一向きこえぬやうだ。

綾衣。

主にも似合はないことを……。けふは盆の十三日で、店は休みでござんすから、三味線も鼓も聞えますまい。

外記。

なるほど今日は十三日……。先月かぎり廓へ足踏みも致さぬが、ゆうべは仲の町の草市であつたな。市は相變らず繁昌したことであらう。

綾衣。

ほんにさうでござんす。主に初めて逢うたのも、一昨年の草市の晩でござんした。

外記。

おゝ、同役の者に誘はれて、生れて初めての吉原見物、草市で押しかへされぬ混雑のなかを、唯うろくゝとあるいてゐると、向うから来たおまへの袖に刀の柄を引きかけて、すりと抜けて落ちようとするのを、あわてゝ押へるそのはすみに、思はずおまへの袖までも

綾衣。

一緒につかんで引き止めた。そのとき顔を見あはせたが、馴染の始め、戀のはじめ、縁といふものは不思議ではないか。

あの晩はいつもよりも賑かたで、大門をくゞつたお武家も大勢、仲の町へ見物に出た花魁も大勢、その大勢のなかで主とわたしが、丁度たがひに行き逢うたのは、よくゝ深い縁でござんせう。

外記。

そのときの刀はこれだが……。わが刀を見る。鍛へは國俊、家重代……。先祖はこれで武名をあけたと、老人共からたびゝ聞かされたものだ。

綾衣。

ふたりに取つては結ぶの神のその刀を、わたしにもよく見せてくださいな。刀をうけ取って鞘のまゝに打眺め。よい刀で切られたら、ひと思ひに死なれるでござんせうな。

外記。

おゝ、鍛へのよい業物なら、苦みも痛みもない。

綾衣。

切つても突いても、苦みなしに……。

外記。

たゞ一思ひに死なれるのだ。

(云ひつ、刀をこなたへ取らんとすれど、綾衣は鞘をつかんで放さず。二人は顔を見あはせて少時は詞もなし。この時、流しの新内語りが三味線を持ち出て、この家の門に立つ。)

新内 かねて二人が取りかはす、起請誓紙もみんな仇、どうで死なんす覺悟なら、三途の川もこれ此のやうに、ふたり手をとれ諸共と、なぜに云うてはくださんせぬ。

(門にてこの文句を語るうちに、外記は刀を取りてわが傍に置き、二人は黙つて唄を聴いてゐる。そのあひだに二人は云ひあはされど寧ろ死なんす覺悟し、綾衣は手桶にさしたる蓮の一枝を持來り、縁に打ちつけて花を砕き、この通りに……と外記の顔をみる。外記もうなづく。奥よりお時は角行燈をさげて出づ。)

お時。手が塞がつてゐますよ。

(新内語りは唄をやめて、流しを弾きつゝ去る。)

お時。今夜は廓が盆休みなので、こんなところまで新内の流しが來た。(ひとり言を云ひながら、行燈を二人のそばに置く。)

外記。これ、乳母。まことに氣の毒だが、なにか酒肴を見繕つて來てはくれまいか。

お時。はい、はい。かしこまりました。

外記。(紙入れより金を出す。)では、これでよいやうに頼むぞ。

(綾衣は取次ぎてお時にわたす。)

綾衣。とんだ御苦勞でござんすな。

お時。この邊には碌な物もございせんから、田町まで一走り行つてまゐります。

外記。急ぐにはおよばぬ。氣をつけて行け。

お時。では、留守をおたのみ申します。

(お時は奥に入る。蟲の聲しきりに聞ゆ。外記と綾衣はしばし詞もなかりしが、綾衣は起つて奥をうかがふ。)

綾衣。おふくろさんは裏口から出て行きました。

外記。お、左様か。世のなかには面白く暮すが得だと、先刻は申したが、その面白い夢も些との

間、おそかれ早かれ座敷牢か甲府勝手か、おまへとも辛い別れをせねばなるまい。

綾衣。では、いつそ死んでくださんすか。(小聲に力をこめて云ふ。)

外記。おまへも死ぬか。

綾衣。たとひどのやうに戀ひこがれても、生きて添はれる身ではなし、先月廓をぬけ出してからは、いつ何時でも死ぬ覺悟で、毎日行水に身を淨め、夕化粧の身だしなみを缺かしたことはござんせぬ。

外記。

やれ、家柄の身分のと、さまざまの手械足枷で、人を責めようとする窮屈な世の中、蜘蛛の巣にか、つた蝶々蜻蛉もおなじことで、命とたのむ花の露も吸はれず、羽翅をしぼられて悶死。あ、なんの因果で武士の子に生まれたか。冥土へゆけば家柄もなし身分もなし、武士も町人も自他平等、うるさい此世にゐるよりも優しであらうよ。

綾衣。

では、けふかぎり五百石のお家を捨て、も、主は惜うはござんせぬか。

外記。

命までも捨て、か、つたからは、五百石の家がなんであらう。先祖が慶長元和の戦ひに、見ごと敵勢を打ち破つて、勝鬨をあけた誇りの笑顔も、外記が世間の人と闘つて、あらゆる邪魔をうち攘ひ、戀と意地とを立て通した最期の笑顔も、鏡に映せばおなじ顔で、勝利の満足に足りはあらまい。

綾衣。

それを聞いて安心しました。主は立派なお旗本、わたしは流れの身なれども、人の命に二つはない。今このふたりが死ぬ際に、お家のことなどを必ず念にかけてくださすな。

外記。

はて、くだい。外記をそれほどの野暮と思ふか。先祖傳來の家をすて、冥土でふたりが新しい家を作らう。(笑ふ)

(大菱屋の若い者喜介出て来り、門口より内をうかがひて、更に外の方にむかつて差招けば、おな

じく伊平と忠藏は駕籠夫に駕籠を吊せて出て、たがひに囁き合ひて、喜介は先づ門をあけて入る。

綾衣は透し視ておどろく。

綾衣。

や、おまへは店の……。

喜介。

へい。喜介がお迎ひにまゐりました。

(外記は綾衣と顔を見あはせる。)

外記。

お、貴様は喜介か。なにしにまゐつた。

喜介。

これは藤枝の殿様……、どうも失禮をいたしました。もし、花魁え。こゝで兎や斯うは申しません。まあ、すなほに歸つて下さい。

(綾衣答へず。)

喜介。

先月の晦日にかけて出したぎりで音沙汰なし、相手は大抵見當が付いてゐるもの、表沙汰にしたら又迷惑する人もあらう。(外記を尻目にみる。と、内證で手わけをして探してゐましたが、眼と鼻の間のこんなところに隠れてゐるようとは、今の今まで些とも知りませんでした。さあ、悪いことは云ひませんから、一緒に歸つて下さい。御内證の方へは私達からまた好いやうに取りなしてあげますから……。さあ、花魁……。

箕輪の心中

外記。いや、綾衣を連れて歸ることは罷りならぬ。

喜介。え、御不承知でございますか。

外記。いかにも外記が不承知だと、立歸つて主人にさう申せ。

喜介。(せうら笑ふ)へ、子供の使ぢやございません。ぢやあ、殿様。どうしても花魁を渡しち

やあ下さいませんか。

外記。え、わからぬ奴だ。歸れ、歸れ。

喜介。へえ、左様でございますか。

(云ひつ、隙をみて外記の刀を奪ひ取り、それと見かへれば、外にかくれたる伊平忠藏はかけ込み  
て、矢庭に綾衣の手をとらへ、無理に引立てゆかんとす。外記は立寄つてなげ退ける。そのあひだ  
に忠藏は綾衣を引立て、庭に降りる。外記は追はんとするを喜介は支へる。伊平も這ひ起きて外記  
に組みつく。駕籠夫は忠藏をたすけて、綾衣を無理に駕籠の中へ押入れんとす。外記は焦つて外記  
奪ひ返し、ひき抜きて振りめぐれば、忠藏は恐れて綾衣をうち捨て、駕籠夫は空駕籠をかつぎ、共に  
表へ逃げ去る。外記は刀をふりあげて追ひ立つれば、喜介も伊平も抜けつくりつ逃げまはりて、  
これも遂に門外へ逃げ去る。外記はあとを見送りに、門に鍵をかける。)

外記。思ひもよらぬ邪魔が這入つた。

綾衣。喜介の顔を見た時には、わたしもはつと思ひました。

外記。切つて捨つるは易けれど、それも無益の殺生と命ばかりは助けて歸した。

綾衣。一旦は追ひかへしても、わたしの居所が知れたからは又出直してくるは知れたこと……

外記。時をうつつさば乳母も歸らう。

綾衣。十さんやお米さんも戻つて来よう。(向うを見る)あのふたりは生きて添はれる身の上……

外記。死ぬのは忌か。

綾衣。なんの。ほムムム。

外記。はムムム。

(顔をみあはせて笑ふ。題目太鼓の音遠くきこゆ。)

外記。又もや妨げのないうちに……。綾衣、来やれ。

綾衣。あい。

(二人は縁に上がり、綾衣は座敷の隅より古びたる半屏風をもち來りて、逆さに立てまはし、縁側  
の手桶より蓮の花三四本を取り來る。)

綾衣。

さつき主に見せたのは、花をちらすといふ覺悟の謎、たがひに解けて斯うなるからは、ふたりが手を取つてあの世へゆき、蓮の臺に半座をわけて、千年も万年も住む心……。これ見てくださんせ。

(蓮の花をむしりて、二人の前にその花を雪のごとくに敷く。)

外記。

綾衣。

成程これは蓮の臺、この世からなる極樂淨土か。いや、風流で面白い。

外記。

書置などと云ふものは、この世に未練のある徒が、亡き後を思つて愚癡をかき残すか。或はこの世に罪あるものが、詫状代りに書きのこすか、二つにひとつ。外記はこの世に未練もなく、また懺悔すべき罪もない。笑ふものは笑へ、誹るものは誹れ、なんとでも云はしておけ。申譯めいた書置などは要らぬことだ。

綾衣。

ほんに主のいふ通り、褒めようが笑はうが、それは世間の人の心まかせで、どつちでも關はぬこと。ふたりの心は二人よりほかに知る人はござんすまい。

外記。

この世界は二人の世界だ。未來までもふたりの世界。

外記。

綾衣。

綾衣……。殿様……。

(二人は顔を見あはせて打笑む。)

外記。

綾衣。

支度いたせ。あい。

(外記は身づくろひして刀をぬく。綾衣は起つて佛壇に線香をそなへ、屏風を二人の前に立てまはす。淺草寺の鐘の聲。切子燈籠は夜風にゆらめく。)

(11)

同じくこの家の裏手。中央は臺所口にて繩簾を垂れ、左右は板羽目、柳の立木などあり。風の音にまじりて題目太鼓の音遠くきこゆ。  
(十吉とお米は足早に出づ。)

十吉。 急いでも夜道は撈取らぬものだ。併しまだ五つにはなるまい。

お米。 おふくろさんが嘸ぞ待つてるんでござんせう。

十吉。 お前の家でも案じて居よう。あいにくに曇つて暗い晩だ。

お米。 来るみちくも方々の家で、おむかひ火を焚いて、盆燈籠をつけて、なんだか寂しうござんすな。

十吉。 私と一緒だ。怖いことはない。

(打連れて上の方の門口へ行きしが、また出て来る。)

十吉。 はて、不思議な。表の戸には錠をかけてある。

お米。 わたし達の歸りが遅いので、おふくろさんは待兼ねて、どこへか買物に行つたのではあるまいか。

十吉。 大方そんなことかも知れぬ。兎もかくも裏口から這入るとしよう。眞暗だから足もとに氣をつけて……。

お米。 あい、あい。

(二人は臺所口へ廻らんとする時、柳は夜風になびきて、お米の顔を打つ。これと同時に稻妻ひら

めく。)

お米。 あれッ……。なにやら光る物が……。 (十吉に取りつく。)

十吉。 今のは稻妻であらう。秋になると毎晩光ることがある。

お米。 わたしは又、人魂かと思ひました。

十吉。 なに、人魂……。かういふ晩にそんな氣味の悪いことを云ふものではない。

(お時は徳利をさげ、風呂敷につゝみたる皿を持ち出て、ふたりを透しみる。)

お時。 十吉ぢやないか。

十吉。 お、阿母さん。

お米。 どこへ行きなされた。

お時。 お客様のおたのみで田町まで買物に行つて来た。

十吉。 なに、お客様が……。

お時。 それ、番町の……。

十吉。 む、番町の殿様かえ。

(お時は静にせよと制して、臺所口に入る。十吉とお米もつゞいて簾をくゞり入る。題目太鼓の音



指さして泣く。

五郎。なに、外記が如何いたした。

(五郎三郎は縁をあがりて屏風のうちを覗き、はつとしたるが、更に屏風のうちに入りて、二人の死骸をあらため、再び出て来る。)

五郎。けふの晝間の一條といひ、かれが屋敷を出でし折に、合點のゆかぬ節もありしと、三左衛門の知らせに付き、とりあへず跡を慕うてまるつたが、よもやかゝる始末とは……。武士

たるものが色に迷ひ、あまつさへ見苦しき死恥を晒して、家を汚し、名を汚し、親類縁者の面にも泥をぬる、かへすべくも憎い奴め。

角助。では、もしや殿様は……。

五郎。言語道斷の大呆氣……。遊女と相對死をいたしたわ。

角助。え。

五郎。いや、かやうな者には構ふにおよばぬ。角助、まるれ。

(五郎三郎は席を蹴つて起たんとするを、お時は止める。)

お時。もし、殿様。御立腹は御もつともござりますが、五百石のお家を捨て、かうおなり遊

ばすのはよくくのこととござりませう。

十吉。わたくし共が差出たやうではござりますが、甥御様御不憫とおほしめして……。せめてお

線香の一本も、供へてあげてくださいませ。

角助。なるほど皆さんのいふ通り、お家を捨て、お命をすて、覺悟をおきめなさるには、云ふ

にははれぬ深い仔細もござりませう。どうか幾重にも御勘辨をねがひます。

(左右より人々に纏られて、五郎三郎もすこし猶豫ふ。唄の聲、遠くきこゆ。)

唄。君と寝やろか、五千石とろか。

お時。あれ、あの唄をお聞きなされましたか。

五郎。む。

唄。なんの五千石、君と寝よ。

(五郎三郎は耳をかたむけて聴く。唄の聲遠く消えて、蟲の聲。)

幕

板倉内膳正

大正三年九月作。

大正七年一月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——板倉内膳正（市川左團次）板倉主水正（市川壽美藏）  
石谷十藏（片岡市藏）彦坂彌五右衛門（市川左升）下男十作（市川左喜之助）僧  
良巖（市川荒次郎）おまん（阪東秀調）おゆら（市川松蔭）など。

登場人物——板倉内膳正重昌。板倉主水正重矩。石谷十藏貞清。彦坂彌五右衛門。池田  
小十郎。下男十作。禪僧良巖。天草四郎の姉おまん。阿蘭陀醫者おゆら。庄屋彦右衛門。  
その妻お豊。その娘お松。その伴三之助。森崎軍記。宮岡彦市。川村新吾。福井藤七。ほ  
かに陣中の醫者。板倉の家來。石谷の家來。庄屋の下女など。

(1)

肥前島原、有馬村の庄屋の宅を陣所にあてたる體、二重屋體にて、上のかたの床の間には鏡櫃  
槍のたぐひを飾り、大なる鏡餅をそなへたり。床の間につゞいて襖、庭には早咲の梅の立木など  
ありて、上手と下手には巴の紋を染めたる陣幕を張る。寛永十四年十二月みそかの夜。庭さきには  
篝火を焚く。

板倉内膳正

(二重の上のかたには屏風を立てまはし、そのなかに板倉内膳正が休息してゐるころにて、屏風の外には彦坂彌五右衛門、これにつゞいて森崎軍記、宮岡彦市、川村新吾、福井藤七の四人、いづれも陣中のこしらへにて詰めてゐる。四人のあひだには火鉢を置きたり。風の音うすきこゆ。)

軍記。

好い鹽梅に風もやんだやうでござるな。

彦市。

きのふは大雨、けふは大風、兎かくに時化がつくこととござるなう。

新吾。

いかにあたゝかい西國だと云つても、師走の夜はやはり寒うござるな。

藤七。

こゝらでも雪が降るといふからは、冬も随分寒いに相違ござらぬ。

(奥より庄屋の召仕ひの女は、炭火を運びて出づ。)

女。

お夜詰の家、さぞお寒いでござりませう。

軍記。

夜がふけたら大分冷えてまるつた。

彦市。

さあ、さあ、これへついで呉れ。

女。

はい、はい。(火鉢に炭をつぐ。)

新吾。

おゝ、大儀であつた。

女。

御用があればお呼びくださりませ。

藤七。

よい、よい。

(女は炭をつぎて去る。四人は火をかこむ。)

軍記。

おゝ、あたゝかい火になつた。彌五右衛門殿にもお手をおかざしなされぬか。

彌五。

いや、私はこれでよい。若い者どもは十分に手足をあたゝめて置かれい。あらためて申すまでもないが、御殿と云はず、陣中といはず、お夜詰にはかならず火を許さるゝがお家の御家風ぢや。いかに武士ぢやと云うて、肝心の手足が冷えかたまつては、まさかの時に思ふやうな働きも出来まい。

彦市。

仰せの通り、口頃からかうして我々をいたはつて下さればこそ、いざといふ時には一命を抛つて御奉公もなると云ふものでござる。

新吾。

どうかして今度の軍も早く埒をあけて、殿様の御苦勞を休めたいものでござるがなう。

藤七。

さりとてもう長いこともあるまい。彌五右衛門殿のお見積りはどうでござるな。

彌五。

さあ、まだ二月や三月はかゝらうかな。

四人。

え。

彌五。

多寡が百姓一揆と侮つてはならぬ。城のなかには大友小西などの残黨も籠つてゐる。力攻

めにしては徒らに味方を損するばかりぢや。さればこそ殿にも御心痛、拙者も共々に胸を痛めてをるのぢや。

軍記。では、氣長に遠巻きにしてゐるのでござるか。

彌五。先づそれよりほかに仕様はあるまいよ。

(四人は顔を見あはせて黙す。下のかたの庭口より庄屋の下男十作、廿四五歳。長崎の女醫者おゆら、廿二三歳を案内して出づ。)

十作。申上げます。

軍記。なんだな。

十作。殿様御病氣のお見舞として、長崎から名高いお醫者様が見えましてござります。

彌五。なに、長崎から醫者がまるつたと……。して、それは誰が指圖でよび寄せたのぢや。

十作。いえ、こちらからお呼び申したのではござりませぬ。殿様が御病氣とのお聞きなされて、御自分からお見舞にお出でなされたのでござります。

彦市。なるほど、それは奇特のことだ。

新吾。先づこれへ通られい。

彌五。いや、待て。大將の御前間近へ迂濶に人は寄せぬものぢや。見るところ、醫者どのは女子

のやうでござるな。

(おゆらは進み出て丁寧に會釋する。彌五右衛門も會釋する。)

おゆら。わたくしはこの島原の生れ、ひさしく長崎に居りまして、いさゝか阿蘭陀の藥法を學びましたもの。このたび當地に戻りましたら、江戸より討手にくだられた板倉殿が、陣中では御病氣との噂。

彌五。いかにも殿は御病中ぢやが、多寡が腫物ぢや。差したることでもござらぬ。

おゆら。して。その腫物は……。

彌五。(右の肩から二の腕をなでる)先づこのあたりに……。醫者の見たてでは疔と申すとのぢや。(肩をひそめる)それは容易ならぬこと。疔は命取りと昔から申します。

十作。まつたく疔は命取りと、だれでも恐れてゐる病でござります。このお醫者様がお聞きになつて、それは重々お氣の毒なことぢや。わしが一度見てあげようと、斯うしてわざ／＼お出でくださったのでござります。

おゆら。失禮ながらありきたりの漢法醫者では、十分のお療治もかなひますまい。習ひおほえた阿

彌五。蘭陀の薬法で、わたくしが屹と御療治いたします。兎もかくも一度御容體を……折角ぢやが、その儀はお断り申す。

おゆら。ならぬと仰せられますか。

彌五。お身を疑ふではござらぬが、素性もしれぬ阿蘭陀醫者に、殿のお療治はたのまれまい。夜中のお見舞御苦勞でござつた。すぐにこのまゝお引取りくだされい。

十作。では、どうでもお療治はなりませぬか。

彌五。ならぬことぢや。早うお送り申せ。

十作。はあ。(おゆらの顔をみる。)

おゆら。はて、ならぬとあれば是非もない。板倉殿ともあるべき大將が戦場の討死ならば知らぬこと、あたら病に命をとられては、武士のほまれでもあるまいに……。 (あざ笑ふ) 思へば氣の毒笑止なことぢや。では、お暇申します。

彌五。(おゆらは會釋して悠々と去る。十作も送つてゆく。)

彌五。なんとやら胡亂な奴ぢや。(咳く。) おゝ、いつの間にか夜もふけた。かゝり火に薪を添へられい。

四人。はあ。(奥に入る。)

(奥より板倉の子息主水正重矩、廿一歳、出づ。)

主水。彌五右衛門。石谷殿がみえられたと申すぞ。父上に申上げい。

彌五。はあ。(屏風のうらに向ひ) 申上げます。軍目附のお越しと申すこととござります。

内膳。(屏風のうらにて) すぐにこれへお通し申せ。

彌五。はあ。(起つて屏風をのける。)

(屏風のなかには板倉内膳正重昌、四十餘歳。病中の體にて敷皮の上に坐り、喘息に凭りゐる。)

主水。父上、御機嫌は如何。

内膳。相變らず痛みをおほえる。(右の手を振つてみる。) どうも思ふやうに働かぬやうぢや。人間

は意氣地がない。

(内膳正は苦笑ひする。軍目附石谷十藏貞清、四十歳ぐらゐ、醫者ひとりと家來二人を連れ、板倉の家來ひとりが松明を照して案内して出づ。貞清は庭さきに来る。)

(無頓着に) どうでござるな、御容體は……。

貞清。毎々のお見舞かたじけなう存じます。

主水。板倉内膳正

(貞清は縁に腰をかけて草鞋をぬぐ。醫者だけはついで上り、家來ふたりと板倉の家來とは一體して下手に去る。)

内膳。

石谷殿にも敷皮を持って。

貞清。

いや、構ふな、かまふな。陣中には珍しい、あたゝかい火があるな。(火鉢をひき寄せる。さして内膳どの。例の腫物はどうぢや。まだ痛むか。)

内膳。

どうも痛んでかなはぬ。殊にすこしは熱もある。困つたものぢや。

貞清。

悪いなう。(眉をひそめる。)

内膳。

江戸出發のみぎりにも、右の脊骨の上に腫物がひとつ出来て、かなり痛むやうではあつたが、何これしきと押して出たら、よい鹽梅に途中で吹つ切つた。これでもうよいことと思つてゐると、このあひだから又腫れあがつて、今度は更に痛みが烈しいやうぢや。けふも試しに……。 (床の間を見かへる。 ) ああの槍を遣つてみたが、どうも右の腕が伸びぬ。

貞清。

あまりに無理をせぬがようござるぞ。醫者の話によると、疔といふ腫物は命にもかゝはるとか申せば、くれなくも大事にせられい。

内膳。

討死は些とも恐れぬが、病では死にたくないな。

主水。

うけたまはれば、江戸表より、更に加勢として松平伊豆守と戸田采女正をつかはされ、近日當地に到着すると申すことのでござりますな。

貞清。

その人数も四五日中にはおそくも到着いたすでござらう。

内膳。

無念の儀ぢやなう。この内膳に武士を捨てよと云はぬばかりのお計らひぢや。

貞清。

お身の氣性としては左もあらう。われくが未だ功をあけぬうちに、あとから松平伊豆や戸田采女が加勢に来る。それでは三河武士の面がたゝぬと、お身がいつもの意地張りから、由ない短氣を起さうも知れぬが、それは悪いぞ、我慢せられい。こゝが大事のところぢや。

主水。

でも、このまゝに日を送りましては、あすにも加勢の人々が到着した節、どの面さけておめく〜と……。

貞清。

はて、そこが我慢といふものぢや。これ、彌五右衛門、お身は老功の者ぢや。(主水正を指さす。 ) かやうな若い人々の燥り立つのを、そばから意見せねばならぬぞ。

彌五。

かしこまつてござります。(今まで黙して思案してゐたる内膳正は頭をあげる。)

内膳。石谷殿は醫者を同道せられたな。(醫者にむかひ)診察をたのみ申すぞ。

醫者。はあ。  
(進み寄りて内膳の脈を診る。更に右の腕をまくらせて診る。)

醫者。はあ。よろしうござる。

内膳。この腫物は幾日ぐらゐで癒るであらうな。

醫者。さあ、まだ四五日はかゝりまする。

内膳。四五日で癒らうか。

醫者。いや、腫物はまだ熱してをりませぬ。四五日いたしたら初めて切開くことも出来ようかと有じまする。それから後は御養生次第。

内膳。では、まだ間があるな。(かながへる。)

貞清。さだめて悶かしいことであらうが、せいふ養生して先づ病にうち勝ち、更に敵に打勝つ

工夫が肝要でござるぞ。時に内膳どの、かの生捕の女はその後如何いたしたな。

内膳。一揆の大將天草四郎の姉まんといふ者、肥後の國宇土の町にかくれ居りしを召捕つて、先

頃より陣中に繋いでござる。

貞清。かれに少しく申聞かせたき儀もあれば、これへお呼び出しくださるまいか。

内膳。仔細ござらぬ。それ、彌五右衛門。

彌五。はあ。(起つて奥に入る。)

(庭の上下より軍記と彦市は薪を持ち出て、篝火を焚きそへ、一禮して去る。奥より彌五右衛門再び出づ。)

彌五。囚人をこれへ牽け。

(庭の下手より板倉の家來ふたりは天草四郎の姉おまん、十八歳を繩にかけて牽いて出づ。すこし離れてあとより下男十作は氣づかはしげに窺ひ出づ。)

彌五。(貞清にむかひ)天草四郎の姉まん、これへ牽き出してござります。

貞清。こりや、まん。面をあけい。

おまん。はあ。

貞清。其方も弟とおなじく切支丹宗門か。

おまん。姉弟とは申しながら、わたくしは淨土宗、御禁制の切支丹宗門ではござりませぬ。

貞清。しかと左様か。

板倉内膳正

主水。それは先日已に取りしらべ、繪踏みまでも致させたれば、疑ふところはござりますまい。

貞清。しからば其方、弟の謀叛をなんと思ふぞ。

おまん。第四郎は一揆の大將と仰がれ、人数をあつめ、城をかまへ、太平の世を騒がしまするは、まことに恐れ多い儀ぢやと存じまする。

貞清。む、先づは神妙ぢや。しからば其方これより城中へまるつて、第四郎に對面し、尋常に降伏するやう説き諭してはどうぢやな。

(おまんは俯向いて黙つてゐる。)

主水。こりや石谷殿のお詞ぢや。しかと御返答をいたさぬか。

おまん。その御返答は相成りませぬ。謀叛人を弟に持ちましたはわたくしの不運。たとひどのやうな厭しいお仕置を受けませうとも、さら／＼お恨みとは存じませぬが、弟に降参をすゝめるお使は……。

貞清。ならぬと申すか。

おまん。善にもせよ、悪にもせよ、これほどの大事を企てます上からは、弟には又弟の分別がござりませう。勝つと負くるは弟の運次第で、これは致方もござりませぬが、姉のわたくし

が我から進んで、弟の仕事をうち壞しまするは、どうも心に忍びませぬ。この儀ばかりは御免くださりませ。

主水。さりとはおのれ辻褃のあはぬ奴。太平の世をさわがす第四郎、おそれ多いことぢやと申したではないか。

おまん。恐れ多いと申したは、一揆の大將としての天草四郎のこと。おなじ血をわけた弟の四郎は、やつぱり可愛うござりまする。

主水。む、よい。理を非にまけて弟を庇うからは、おのれも一揆の同類ぢや。夜があげなば城外へ連れゆきて、敵への見せしめに磔刑にいたすぞ。

(十作おどろく。おまんは眼をとぢてゐる。)

貞清。いや、殺すは易いこと、急くには及ばぬ。みだりに生捕を殺さぬが軍の法でござる。

主水。でも、餘りに憎うござれば……。

(十作すゝみ出づ。)

十作。恐れながら殿様方に申上げます。わたくしは矢はり肥後の生れで、このおまんとはおなじ町に育つた者でござりますれば、あらためてわたくしからよく得心のまるるやうに、屹と

彌五。

十作。

貞清。

家來。

十作。

家來。

貞清。

内膳。

貞清。

内膳。

貞清。

意見をいたしませうから、どうぞ明日のお仕置は御免なされて下さりませ。

其方どもの意見ぐらゐで、素直に得心いたせばよいが……。

まあ、兎も角もおまかせくださりませ。

殺すにもせよ、赦すにもせよ、今はまだその時でない。一先づあれに繋ぎ置いて、取逃さぬやうに心をつけられい。

はあ、立て、立て。(おまんを引立てる。)

ありがとうございます。

ありがとうございます。

(家來二人はおまんを引立て、去る。十作も會釋して去る。)

さすがは四郎の姉だけあつて、性根の据つた女ぢやなう。

(思案して。)女子にも意地はある。

(思案して。)その意地づくが身の仇ぢや。

意地づくならば命も要るまい。

意地をこらへるも一つの意地ぢや。

(時の鐘きいゆ。)

貞清。

内膳。

主水。

彌五。

内膳。

貞清。

主水。

貞清。

内膳。

醫者。

主水。

彌五。

家來。

今鳴るは除夜の鐘、うち切るまでは年の内、

打切るまでが人の命。

年がかはれば世も替る。

あすの日和は雨か風か。(空を仰ぐ。)

一夜明くるが待たるゝわ。

(慰めるやうに。)一夜あくれば春が来るわ。

(鐘の聲やむ。貞清起ちあがる。)

もはやお歸りでござりまするか。

おいとま申す。

夜中のお見舞。かたじけなうござつた。

御免くださりませ。

おゝ、大儀であつた。

(下手にむかひ。)石谷どのお立ちでござるぞ。

はあ。

板倉内膳正

貞清。

(下手より松明を持ちたる板倉の家來をさき、石谷の家來ふたり出づ。貞清は草鞋をはく。)

内膳。

内膳どの。かへすくも病氣を大事に……。

ありがたうござる。

内膳。

(貞清は醫者と家來どもを引連れて去る。)

彌五。

こりや彌五右衛門、さきごろより入魂にいたす龍立寺の禪僧、即刻御意得たければお越し

内膳。

はあ。(起ちあがる。)

彌五。

待て、待て。

内膳。

はあ。

彌五。

小十郎が居らばすぐにまゐれと云へ。

主水。

かしこまりました。(奥に入る。)

われ／＼が討手として當地に到着せしは今日五日、いまだ一月にも相成らぬに、更に江戸より松平や戸田の人々を差向けらるゝは、所詮われ／＼の力では及ばぬと見限られたのでござりませうか。

内膳。

内膳も武士ぢや。もう此上はたゞ安閑としては居られぬ。先刻より思案は疾くに定めて置いた。

主水。

して、その御思案は……。

(摺寄る時、奥より池田小十郎、二十三歳出づ。)

小十郎。

召しましたか。

内膳。

おゝ、小十郎。其方これより早舟を仕立て、沖にかゝりし阿蘭陀船に漕ぎつけ、甲比丹に對面して、明日早朝より城攻めにかゝる間、関の聲のあがるを相圖に、海の上よりも城に

むけて、大砲を隙間なく打ちかけいと申せ。

小十郎。

心得ました。

内膳。

急いでゆけ。

小十郎。

はあ。(奥に入る。)

主水。

では、いよ／＼城攻めでござりますか。

内膳。

天草島原の一揆ども征討のために、われは總大將の采をとり、近國諸國の大小名を率ゐて、當月五日よりたび／＼の城攻めを試むるといへども、兎かくに軍ははか／＼しからず、心

しきりに焦立つ折柄、更に江戸より加勢の大將をつかはされしは、おそらく江戸城中の評議に於て、内膳一人では心もとないと定まつたのであらう。さりとは無念、武士たる者の恥辱この上もないことぢや。所詮、内膳がゆくべき道は唯ひとつ、加勢の來たるを待たずして無二無三に城へ攻めかけ、一日半日のうちに敵を踏み破るか、但しは堀の埋草となつて相果つるか。勝つか負くるか、運を一擧に定むるのほかはない。狂ひ死とも死急ぎとも云はゞいへ、これが即ち武士の意地ぢや。

仰せ一々御もつともにござります。意地をたてぬくが三河武士の習。この期におよんでは家も命も、武士の意地にはかへられませぬ。板倉一家の安危存亡などかならず御念にかけられますな。

主水。

むゝ、よくぞ申した。即刻に出陣の用意を申付けい。

内膳。

はあ。(かんがへる。)ではござれども、先刻醫者の申すによれば、父上のお痛み所はまだ四五日の後ならでは……。

邪が非でもいくさは整ぢや。手配りをおこたるな。

主水。

はあ。(急いで奥に入る。)

内膳。

あけても暮れても、遠巻きにして関の聲ばかりあける鶏軍、そんなことでは埒があかぬ。あすは直寄せに押寄せて、有無を云はさず手づめの勝負ぢや。

(内膳起ちあがりて、床の間の槍を持ち來り、しこいて見る。右の腕の痛む體にて忌々しげに舌打する。)

内膳。

生憎の腫物で思ふやうに働かれぬ。むかし唐土の關羽は毒矢に肘を射られし時、笑つて骨を削らせたといふ。むゝ、よい、よい。

(内膳打笑みながら刀の小柄をぬき取り、右の袖をまくる。下のかたより以前のおゆら窺ひ出づ。)

おゆら。

殿、しばらくお待ちなされませ。

内膳。

さういふは誰ぢや。

おゆら。

わたくしは長崎の醫者でござります。

内膳。

先刻屏風のうちに聞いて居つたが、和蘭陀醫者とは其方か。

おゆら。

御自身に刀をお執りになるはおあぶなうござります。わたくしが切つて進ぜます。

内膳。

丁度よいところぢや。しからば頼む。これへまゐれ。

板倉内膳正

おゆら、御免くださりませ。

おゆら、これは縁にさがりて、頸にかけたる袋よりナイフを出す。内膳は腕をさしつける。

おゆら、これは大層腫れました。さだめてお痛みでござりませう。

内膳、このごろは兎角に痛んでならぬ。

おゆら、これは疔と申して、きはめて症の悪い腫物でござります。

内膳、（おゆらは腕の腫物を切るとみせかけて、矢庭に内膳に切つてかゝる。内膳は二三度遣り違はし、左の手にておゆらの襟髪を把つて引き据ゑ、わが膝の下に敷く。）

内膳、え、面倒な。おのれは頼まぬ。

主水、（おゆらのナイフを奪ひ取り、左にそのナイフを持ちて、わが右の腕の腫物を劈く。奥より主水正出て来りておどろく。）

主水、や、この女は……。

内膳、いや、這奴はかまはぬ。先づわしが腕を巻いてくれ。

主水、はあ。

（主水正はありあふ薬茶碗を把りて、内膳が腕の血をしぼり、更に白布を取り出して傷口をまく。）

軍記、このうちに奥より軍記、彦市、新吾、藤七の四人も走り出づ。

内膳、殿、いかになされました。

彦市、わしが自分で腫物を切つたのぢや。

内膳、して、その女は……。お、そちは先刻の女醫者ではないか。

四人、腫物を療治すると申して、わしに突いてかゝつたのぢや。

新吾、え。（顔をみあはせる。）

藤七、さりとはおのれ不敵の曲者。

主水、厳しく詮議をせねばなりませんまい。

四人、それ、引据ゑい。

主水、はあ。

（四人はおゆらをとらへて縁先に引据ゑる。おゆらは覺悟して騒がず。）

おゆら、こりや、女。おのれは何者にたのまれて、かゝる大事を巧んだぞ。つゝます云へ。まつす

おゆら、ぐに申せ。

誰にたのまれも致しませぬ。神の御心にしたがつて、悪魔をほろほしに参つたのでござり

ます。

主水。

む。さてはおのれも一揆の同類、切支丹の邪宗門であるな。

おゆら。

教のために身を殺すが、わたくしどもの本意でござります。

内膳。

切支丹宗門がそれほどに尊いか。左ほどに奇特あるならば、わが目の前にてその燃ゆる火

を消してみせよ。

おゆら。

それは易いこと。

(内膳は庭のかぶり火を指さす。おゆらは頸にかけたる十字架を額にかざし、眼をとちて暫らく念す。)

おゆら。

サンタ、マリヤ……。

軍記。

(庭のかぶり火が一度に消えしは……)

内膳。

や、かぶり火が一度に消えしは……。

(皆々おどろく。内膳は衝と立ち上りておゆらを一刀に切倒す。)

内膳。

人々決して恐るゝな。邪は正に克たすといふぞ。彼等たとひ邪法をおこなふとも、先づこの通りに亡ぼされたわ。はゝゝゝ。

(鶏の聲きこゆ。)

内膳。

(血刀をぬぐふ。お、一番鶏がきこゆるわ。)

主水。

それ、死骸を取捨てい。

四人。

はあ。(おゆらの死骸をかたづけける。)

(奥より庄屋彦右衛門、妻おとよ、むすめお光、せがれ三之助(前髪)の四人は、屠蘇を入れたる銚子三方などをさゝげて出づ。あたりは少しく明るくなる。)

彦右。

新年の御祝儀申上げます。

おとよ。

初春の御壽に。

おみつ。

粗末ながらお屠蘇一献。

三之助。

召し上られて下さりませ。

主水。

これも一年一度の元日。

内膳。

陣中とはいへ、春は春ぢや。一同、めでたいなう。

四人。

おめでたうござりまする。

(彦右衛門等四人は頭をさげる。内膳は起つて床の間より陣羽織を持ち來りて着る。軍記、彦市、

内膳。

新吾、藤七等再び出て来りて、縁先に居らぶ。  
さらば屠蘇を祝はうか。

内膳。

（三之助は三方をさへげて出で、おみつは酌をする。内膳飲みをはりて主水にまはす。）  
主水も聞け、みなも聞け。けふは正月元日とて、敵もおそらく油断して備を怠つてゐるであらう。その虚に乗じて不意に攻めよせ、たゞ一戦に運を定めん。千人が百人、百人が一人になるまでも、必ずあとへは退くまいぞ。

主水。

内膳。

あづまの武士が西へ来て、一年一度のめでたき日に、討死するも弓矢の習、水さかづきに屠蘇をのめ。

家來等。

はあ。

（これより主水正をはじめ、家來四人もかけるく屠蘇を飲む。そのあひだに内膳正は矢立を取  
りて、白扇にさらく〜と書く。）

内膳。

こりや、彦右衛門。其方後刻に石谷殿の陣屋へまるつて、本人へ直々にわたしてくりやれ。

彦右。

かしこまりました。

内膳。

別に急ぐには及ばぬぞ。

彦右。

はあ。

（三之助は再び三方を内膳のまへに持ちゆく。内膳はおみつに酌をさせて飲む。）

内膳。

いくさの門出ぢや。この土器は貰うたぞ。（土器を庭に打割る。）貝をふけ。

家來等。

はあ。

（内膳は云ひすて、奥に入る。主水正も家來四人もつゞいて入る。）

彦右。

元日の屠蘇を水さかづきに、すぐに出陣あそばすとは、武士の習といひながら、勇ましいやうな、悲しいやうな。

おとよ。

どうかめでたく凱陣なさればよいがなう。

（奥にて貝の聲きこゆ、下のかたより禪僧良巖は板倉の家來ふたりに支へられながら出づ。）

家來甲。

これ、これ、御僧はいづれへ参らるゝ。いかに陣中とは申しながら、正月元日に出家は

家來乙。

不吉だ。

二人。

なんの御用か知らねども、また出直して明日でもござれ。

お歸りなされ、お歸りなされ。

良巖。(一向に頓着せず。)はて、お身達の知つたことでない。おほみそかでも元日でも頓着はござらぬ。呼ばれたら来る分のことぢや。板倉どのはいづこにござる。良巖がまるつたぞ。(奥に向つて呼ぶ。)

(奥より板倉内膳正は鎧をかへて出づ。)

内膳。お、御坊か。(立つたるまゝにて。)如何是勇士恁麼事。

良巖。吹毛急用不レ如レ前。

内膳。生死交謝時如何。

良巖。兩頭俱截斷、一劍倚レ天寒。

内膳。はあ。(頭をさげる。)おわかれ申すぞ。

(内膳正は再び奥に入る。家來ふたりも下手に去る。貝の聲きこゆ。)

おみつ。むづかしさうな今の問答。

三之助。わたくしどもには何のことやら判りませぬ。

(下のかたより彦坂彌五衛門急ぎ出づ。)

彌五。お、御坊。お早うござつたな。心得ぬあの貝の音は……。

良巖。板倉どのは最早出陣とみえましたぞ。

彌五。なに、出陣……。南無三、出しぬかれたか。憎い殿め。(奥へ走り入る。)

良巖。建武の昔、楠判官正成は湊川討死のみぎりに、兎ある禪寺へ駆け込いで、最後の問答をこゝろみしと云ふ。板倉どのが我を召されたも、おほかた同じ心であらうよ。(ひとり言のやうに云ひて奥をみる。)

(貝の聲また聞ゆ。石谷十藏貞清は急ぎ足にて出づ。)

貞清。時ならぬ貝の音は……。にはかに出陣とおほゆるぞ。さりとは合點のゆかぬ。(庭先に來る。)

彦右。お、石谷様。丁度よいところへお越し下されました。唯今お前さまに差上げてくれいと仰せられて、板倉様からこれをおあづかり申して居ります。(扇を出す。)

貞清。(うけ取りて讀む。)去年の元日は江城において烏帽子の緒を締め、今年今日は鳥原の城に於て兜の緒をしめ申し候。一首ありけに候へ共、いそぎ戦死申し候。何事もかはりゆく世の習、今更に候。可祝。(よみ終る。)

彦右

水さかづきまでなされてござりまする。

貞清

あたり武士を見殺しにはなるまい。兎もかくも追つ駈けて、引戻さねば……。

(貞清急いで下手へ行かうとするを、良巖はひき止める。)

貞清

おゝ、御坊か。

(良巖は梅の枝を折りて、花をちらしてみせる。)

良巖

はゝ。これぢや。

貞清

むゝ。(かんがへる。花は散つても香は残る。)

良巖

わかりましたかな。

(良巖は枝をすてゝ去る。)

貞清

これも餘儀なき武士の意地、今更とめても止まるまい。思ひのまゝに討死さして、芳ばしき名を残させるが、却つて武士のなさけであらうか。

(貞清は縁に腰をかけて思案す。貝の聲きこゆ。)

(二)

おなじく濱邊。夜の白みし景色にて、正面は天草灘の遠見。舞臺に沙地の布をしき、上下好きとこゝろに磯馴松の立木あり。浪の音きこゆ。

(上のかたより下男十作はおまんに養をきせて連れて出づ。)

十作

もし、こゝまで来ればもう大丈夫でござります。さあ、どこへなりともお供いたしませう。わたしはお仕置を覺悟して、いつまでも繋がれてゐる覺悟であつたものを、おまへが無理にこゝまで連れ出して来て、これから先はなんとならうぞ。

十作

うはべは何氣なく奉公して居りますが、わたくしも實は切支丹宗門に歸依して居りますもの、なんでお前さまを見殺しになりませうぞ。兎もかくも行かれるところまで行つて御覽なされませ。わたくしが御案内申します。

十作

(十作はおまんの手をひき、下のかたへ行きかけて又立止まる。)

十作

いや、こつちへ行つては黒田や細川の陣所……。(引返して東の花道のかたへ行きかゝりて又立止まる。)

いや、いや、いや、こつちには榊原や立花が固めてゐる筈。

おまん。三方はみんな塞がれて、海のほかには道もあるまい。

十作。はて、お案じなされますな。いよく、逃路がないとあれば、いつそ四郎様のお出でなさる城中へお越しなされませ。

おまん。わたしは城へゆくのは忌ぢや。わたしは謀叛人となつて死にたくない。おなじ姉弟でも、四郎とわたしとは教へも違へば心も違ふ。

十作。それを今更云つてゐる場合ではござりますまい。

(上のかたにて貝の聲きこゆ。)

十作。あれ、お聞きなされませ。板倉の人数がもう繰出してまゐります。さあ、さあ、早くお出でなされませ。

(十作は無理におまんの手を取りて下のかたへ連れゆかんとする時、下の方の汀に小船あらはる。船には池田小十郎乗込み、ほかに家來ひとりが漕いでゐる。)

小十郎。(すかし視る)怪しい奴等ぢやなう。(船より出でて二人のあひだに割つて入る。)おのれ等は何者ぢや。

おまん。(顔をそむけてうづくまる。)

小十郎。兎もかくも詮議がある。(家來を見かへる。)それ、引立てい。

家來。はあ。

(家來は進み寄つておさへんとするを、十作はふり放して向うへ逃げてゆく。家來は追つてゆく。おまんは海の方へゆかんとするを、小十郎は松の立木のあひだをくゞりて追ひ廻し、うしろよりおまんの蓑をつかめば、蓑は小十郎の手に残りて、おまんは海にとび込む。)

小十郎。いよく、以て不審の奴、取損じたは残り多い。

(貝の聲きこゆ。)

小十郎。お、殿にはもはや御出陣か。

(上のかたより板倉内膳正は龍がしらの兜をかぶり、槍を持ちて、馬をひかせて出づ。板倉主水のしやう。正もおなじく槍を持ちてしたがふ。ほかに軍記、彦市、新吾、藤七、その他の家來大勢は鐵砲または槍を持ちてつゞく。ほかに半月の馬標を持つたる者あり。)

(ひざまづく)殿、唯今戻りましたござります。

内膳。お、小十郎。阿蘭陀船の掛合はどうであつたな。

小十郎。カピタンに面會して仰せのおもむき申談じましたところ、異議なく承知つかまつりました。

板倉内膳正

た。

主 水。海よりは太筒を以て打ち惱まし、陸よりはわれくが遮二無二押寄せたら、城の奴原もたまるまいぞ。

内 膳。いざ、押出せ。

一同。はあ。

(内膳 正は馬に乗らんとするところへ、彦坂彌五衛門に上のかたより走り出づ。)

彌 五。殿、待たれい。この彌五右衛門を出しぬかれたは一生のお恨でござるぞ。

内 膳。予の書置をまだ讀まぬか。其方はあとに残つて、をさない子供等の世話をしたのむぞ。

彌 五。そのやうな腰ぬけ役は餘人に仰せつけられい。拙者は御免ぢや、御辭退申す。たとひ殿に

萬一のことがおはさうとも、京都には立派な兄御もある。あとくのことまで御懸念は無

用ぢや。さあ、殿。彌五右衛門が御奉公納めに、御馬の口を取り申さう。(馬のまへに立つ。)

小十郎。御用人格の彌五右衛門どのが、御馬の口を取らるゝか。

彌 五。けふは常の軍とは違ふぞ。飽までも御主君のおそばに付き添うて、御先途を見とゞくるが

拙者の役目ぢや。その馬柄杓をこれへ……。いざ、召されい。

(彌五右衛門は馬の口取より馬柄杓をうけ取りて我が腰にはさむ。)

内 膳。では、是非もない。彌五右衛門とも久しい馴染ぢや。一緒に冥土へ行かうかなう。(笑ひながら馬にのる。)

(向うより以前の小十郎の家來走せ歸る。)

家 來。申上げます。唯今の怪しき奴は城のなかへ逃げ込みました。

主 水。怪しい奴とは……。

小十郎。唯今これにて怪しきふたりを認め、取押へんと存せしところ、一人は海に飛び込み、一人

は逃げ去りました。

彌 五。そやつが城に這入つたからは……。

主 水。敵もわれくの寄するを早くも知つて、防禦の備を立てたかも知れぬな。

内 膳。よい、よい。敵に備のあらばあれ、たゞ一息に踏みつぶすまでのことぢや。けふを命日と

心得て、いづれも必死の働きせよ。卑怯未練のふるまひして、先祖の位牌に泥をぬるな。

一同。はあ。

内 膳。あれ、見よ。海は紅うなつた。寛永十五年正月のあけほの、初春のあさは日は鏡を照らし

板倉内膳正

一同。

て、われくの最期を華やかに飾るわ。いさふれ方々。  
はあ。

(内膳は馬上にて槍を取直す。正面の海には朝日かゞやき昇りて、なちこちにて鶏の聲勇ましくき  
こい)

幕

阿蘭陀船

大正五年四月作。

大正十年四月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——堺屋助左衛門（尾上多見藏）お春（市川松蔭）手代和三郎（市川壽美藏）道具屋利兵衛（市川左升）狂女おまき（中村雀右衛門）岩瀬源之進（市川市十郎）僧日圓（市川荒次郎）など。

登場人物——堺屋助左衛門。その娘お春。堺屋の手代和三郎。おなじく吉助。小間使おきみ。道具屋利兵衛。狂女おまき。役人岩瀬源之進。法住寺の僧日圓。ほかに丁稚、掃方大勢、夜まはりの男など。

(一)

寛永十六年、九月下旬の夕。

長崎興善町の唐物問屋、堺屋助左衛門の奥座敷。縁つきの二重屋體にて、贅澤なる生計向きを見せたる家の構へ。上のかたに床の間、これにつゞいて出入りの襖あり。軒には異國風の燈籠を吊り、座敷の置物等にも唐または南蠻の作品などありて、すべて一種の異國情調を帯びたり。庭には松の立木石燈籠、飛石などあり。下のかたには低き四つ目垣と技折戸ありて、垣の裾には菊など咲けり。

(幕あくと、小間使おきみ出て来りて、軒の燈籠に灯を入れる。下のかたより蛇神遣ひおまき、三十五六歳、破れたる笠を持ちて窺ひ出づ。)

(透しみる。)そこにあるのは誰でござんすえ。

わたしぢや、娘に逢はしてくだされ。

え。(庭に降りる。)おゝ、お前は……あの、おまき殿とやら。

娘は内に入りますかいの。

(おきみは答へず、たゞ薄氣味わるさうに眺めてゐる。手代和三郎、廿二歳、奥より出で、窺ひたりしが、この時つかく〜と進み出づ。)

和三郎。誰かとおもへば蛇神つかひの、切支丹のと、色々の名のついてゐる宿無しのおまき殿か。

断りも無しになんでこゝへ来たのぢや。さあ、さあ、早う歸つた、歸つた。

おまき。娘は内に入りますかいの。

和三郎。はて、埒もないことをいつまでも云ふ人ぢや。おまへの娘などが何でこゝの家に入るものか。それともほかに用があるなら、裏口の方へ廻らつしやれ。

おまき。むすめに早う逢はしてくだされ。

おきみ。あれ、まだあのやうなことを……。

和三郎。こりや氣狂ひぢや。とても素直には出てゆくまい。(庭に降りる。)これ、蛇神つかひ殿、切支丹殿、おとなしく出て行けばよし、うじくしてゐたら痛い目みせるぞ。

(おまきは黙つて其顔をちつと見つめる。和三郎も薄氣味悪さうに逡巡りしながら叱る。)

和三郎。さあ、疾と、行かつしやれ。え、行かぬか、まだ行かぬか。困つたものぢや。

おきみ。こりやもう寧ろ旦那様へお知らせ申すよりほかはあるまい。

(主人の助左衛門、六十餘歳、法體のすがたにて奥より出づ。)

助左衛。いや、いや、様子は蔭で聴いてゐた。

和三郎。おゝ、旦那様。このやうな奴が奥へ押掛けてまゐりまして、娘はゐるかの、娘に逢はせろ

のと、なにが何やら理窟の讀めぬことばかり申しますので、困り果てゝ居ります。

助左衛。よい、よい。騒ぐには及ばぬ。(縁先に出る。)これ、おまきどの。暫らくこゝらに姿を見せ

ぬやうであつたが、この頃は何處にござつたの。

おまき。海邊の岩屋に棲んでゐました。

助左衛。それはお前にはよい棲家ぢや。いつまでもそこに入るたらよからうに、なぜ町の方へ出て来

られた。

おまき。

今夜のうちに娘に逢はねば、一生再び逢はれまいと、神様のありがたいお告があつて……

和三郎。

たとひどんな御告があらうとも、お前の娘などがこゝの家にあるものか。ほかを探して見たがよい。

おまき。

娘は内（うち）にゐませぬか。

和三郎。

はて、くどい。知れたことぢや。

助左衛。

（思案して。）なう、おまきどの。お前の娘とかいふ人は、どこに拾はれてゐるか奉公してゐるか知らぬが、今のお前の身の上でたづねてゆくは考へものぢや。娘が眞實可愛いと思ふならば、いつそ逢はずに歸らつしやれ。それが結句（けつご）たがひの爲（ため）ぢや。お前の素性はこの長崎中（ながさきなかつ）でも知つてゐる。その娘と知れたならば、どんな難儀（なんぎ）にならうも知れまい。なんと然（さ）うではあるまいか。

おまき。

ぢやと云うて、一生の別れとなれば……。

助左衛。

はて、何（なん）でそのやうなことがあらう。私がたしかに請合（まねあ）うた。まあ、安心して歸らつしや

おまき。

れ。さあ、決して悪いことは云はぬ。早（はや）う歸らつしやれ。萬一（ばんいつ）別れねばならぬやうなことがあつたら、私がきつと逢はして遣（や）ります。な、判（わか）つたら早（はや）う歸らつしやれ。

（うなづく。）そんならわたしはもう行きます。母（はは）が今夜逢（あ）ひに來（き）たしるしに。これを娘（むすめ）にとどけて下（くだ）され。（懷中（くわいちゆう）より異國風（いこくふう）の短（みじ）き劍（けん）を出す。）

和三郎。

え、そんなものを……。

助左衛。

まあ、よい。兎（う）も角（かく）もあづかつて置きやれ。（眼（め）で知らせる。）

和三郎。

（おまきに。）そんなら確（たしか）にあづかつた。もうこれで用（もち）はあるまい。歸（かへ）らつしやれ、戻（もど）らつしやれ。

（無理（むり）におまきを押出（おしだ）して技折戸（しやせと）を閉（し）める。おまきは悄然（しん然）と出てゆく。）

和三郎。

やれ、やれ、とんでもない蛇神（へびがみ）が舞（ま）ひ込んだものぢや。おきみどの、淨（きよ）めに鹽花（しほはな）でも撒（き）いて置（お）いたがよい。

助左衛。

あれもおなじ人間（にんげん）ぢや。そのやうにせずともよからう。おきみは奥（おく）へ行（い）つて、娘（むすめ）をこゝへ呼（よ）んで來（き）や。

おきみ。

はい、はい。かしこまりました。

助左衛。和三郎には些と話したいことがある。おまへはこゝに……。

和三郎。はい、はい。

おきみ。では、嬢さまをすぐにお呼び申してまゐります。(奥に入る。)

和三郎。天草の騒動以来、切支丹の詮議はきびしいと聞きましたに、なぜあのやうな女を捨て置かれるのでござりませうな。

助左衛。あれは氣狂ひぢや、上でもむづかしい御詮議もなざるまい。時にあの女が置いて行つたものを鳥渡見せやれ。

和三郎。異國の切支丹の持つてゐる劍のやうでござります。

助左衛。(取つて見る。)さうぢや。異國の人の持つてゐる短い劍ぢや。細工もなか／＼見事に出来る。さだめて値の高い品であらうよ。

(助左衛門は思ひありげに短劍をうちかへして眺めてゐる。下の方より道具屋利兵衛、三十七八歳、丁稚に案内されて出づ。)

丁稚。利兵衛どのが見えました。

助左衛。おゝ、利兵衛殿か。これへ、これへ。

利兵衛。御懇意つからにお庭先へまはりました。

(丁稚は去る。利兵衛は縁にあがる。)

和三郎。利兵衛どの、ようお出でなされました。

利兵衛。いや、和三郎どの。いつも云ふやうぢやが、こなたは若いに似合はず、身持は堅固、商賣は上手。どこへ行つても褒めぬ人はござらぬぞ。こちらのお店でもよい御奉公人をお持ちなされてお羨ましいことぢや。は、ムムムム。

助左衛。(短劍を床の間に置いて座にかへる。)商人がよい奉公人を持つたは、お武家業がよい家來を持つたと同じこと。お世辭にもさう云うてくださると、わしも鼻が高うござる。これ、和三郎。女子どもに云ひ付けて、利兵衛殿にお茶をあけい。

和三郎。はい、はい。では、鳥渡御免くださりませ。(奥に入る。)

利兵衛。丁度あたりに人も無し、ちと内密に御相談いたしたいことがござる。あらためて云ふまでもなければ、あの天草島原の騒動からこの長崎の町も火の消えたやうな寂れ方で、これでは所詮立ちゆかぬと、思案の果に思ひついた金儲け仕事、なんと一肩入れては下さらぬか。わしも商人冥利、儲かると云ふことなら随分身を入れて働くまいものでもないが、して、

その相談といふのは……。

利兵衛。(聲を低める) まじめの商賣では十露盤の取れぬ世の中、遠い沖へこつちの代物を積み出して、異國の船と交易をしますのぢや。

助左衛。遠い沖へ出て異國の船と交易する。では、抜荷買ぢやな。

利兵衛。まあ、早く云へばそんなものぢや。

助左衛。いや、そりやなるまい。抜荷買は海賊同様の重い御法度で、それがあらはれたら我身は磔刑、家財は没收ぢや。途、途方もないことを云はつしやるな。

利兵衛。さう聲高に云はつしやりますな。世間に知れたら物がな。

助左衛。世間に知れて悪いことをこの助左衛門に勧めに來たか。親の代からの唐物商賣、奉行所のお許しを受けて立派に暖簾をかけてゐる堺屋助左衛門に御法度破りの抜荷買とは、よいことを教へてくださった。よい智慧を附けてくださった。きつとお禮を云ひますぞ。(苦り切つて云ふ。)

利兵衛。はて、こなたのやうにがみ／＼と噛み付かれては、話も相談も取りつく島がない。あゝ、こなたは結構なお人ぢや。潔白なお人ぢや。その潔白なお人にむかつて、假にもこのやう

な相談を持ちかけたは、わしが悪い。利兵衛が一生のあやまりぢや。どうぞ料簡してくだされ。時に助左衛門どの。今度長崎奉行所から殿しい御觸れの出たことを、こなたも定めて御承知であらうな。

助左衛。御觸れといふのは、異國の血筋をひいた者を残らず調べて申上げよとの事か。

利兵衛。それぢや、それぢや。天草の詮議から自然と切支丹の詮議もむづかしくなつて、南蠻人の

血筋をひいた者は、のこらず召捕つて御仕置になるともいひ、または日本の國から追ひ拂はれるとも云ひ、どつちにしても重い科は逃れぬといふ噂ぢや。こなたのやうな正直潔白なお人は、もとより何のかゝり合はあるまいが、まあ氣を注げたがようござるぞ。

助左衛。わしは先祖代々の日蓮宗、切支丹宗門などには些とも係り合はござらぬのぢや。

利兵衛。こなたが切支丹でないことは、私もよく知つてゐるが、こなたはこの通りの御大家ぢや、大勢の家内眷族のなかには又どのやうな者があつても限らぬ。それを知つてゐるものが訴人したら……。いや、潔白なこなたに對つてこのやうなことを云ふのは、釋迦に説法ぢや。又吐られぬうちに早く歸りませう。助左衛門どの、おいとま申します。

(利兵衛は意味ありげな詞をのこして立歸る。奥より和三郎は燈臺を持ち出て出づ。)

和三郎。あの利兵衛といふ男は、見かけによらぬ大膽者でござりますな。ようぞお断りなされまし  
た。

助左衛。〔罵るやうに。〕御法度の網をくゞる抜荷買、承知してよいものか。

和三郎。しかし今の彼奴の詞では、こちらのお家になにか後ろ暗いことでもあるやうな。ほんに忌  
ましい奴でござります。もう少し云ひ募つたら、堪忍することぢやござりませぬ。

助左衛。まあ、よい。なんとでも云はして置け。して、娘はどうしたぞ。

和三郎。あれにおいでゞござります。嬢様。嬢様……。〔奥にむかつて呼ぶ。〕

お春。あい、あい。

〔助左衛門のむすめお春。十七歳、華美やかなる姿にて奥より出づ。〕

お春。なんぞ御用でござりますか。

助左衛。お、用がある。大切な用がある、ふたりともに近う來やれ。いや、待て、待て。話をす  
る前に見せておくものがある。〔奥に入る。〕

和三郎。お前様とわたくしとに改まつてお話とは、どういふことでござりませうか。

お春。もしや二人を女夫にすると云ふやうなありがたいお話ではあるまいか。もしさうであつた

らば、おまへはなんと返事をしやるぞ。

和三郎。さあ。

お春。忌といふか、應と云やるか。〔措寄る。〕

和三郎。なんで忌と申しませう。

お春。嘘はないかえ。

和三郎。かならず嘘は申しませぬ。あれ、旦那様が……。〔奥をみかへりて二人は離れる。〕

〔助左衛門は異國風の男の服を持ち出て出づ。〕

助左衛。さて和三郎。十歳の年からこの堺屋に奉公して、この年になるまで酒のます博奕うたず、  
目と鼻のあひだの丸山へすら一度も足踏みしたことのないは、あつばれ私の眼がねにかな  
うた男。ゆく／＼は娘の聲にと、かねて心構へをしてゐたが、ふたりにも異存はない様子。  
幸ひけふは吉日ぢや、こゝですぐに内祝言させたい。

二人。え。

助左衛。と云ふたら、あまり早急とも思はうが、これには深い譯のあることぢや。まあ、この衣裳  
をみやれ。蟲干の時にもむざとは持出さず、葛籠の奥にしまつて置いた異國の衣裳、これ

はお春が父の形見ぢや。

お春。

え、それが父の形見とは……。

助左衛。

まことを云へば、お春は助左衛門の血をわけた娘でない。今から丁度十八年前に、この長崎へ渡つて来たイスパニアの船の船長が、町の若い娘と馴染をかさねて、その腹に宿つた胤ぢや。

お春。

え、(いよいよ驚く)

助左衛。

生まれぬうちに船は出る。國は遠うても人情はおなじことで、男と女とは悲しい泣別れをした。そのとき相手のイスパニアの男が形見に残して行つたのがこの衣裳ぢや。

お春。

助左衛。

今の今までそんなことは夢にも知らずに居りましたが、そんならまことの父さまは……。髻のあかい、眼の碧い異國の人ぢや。聞けばその人は國へ歸る途中、遠い沖でおそろしい風雨に出逢ひ、船も人も深い底に沈んでしまつたとやら。(ほろりとする)

和三郎。

助左衛。

いや、その母は生きてゐる。イスパニヤの男とわかれてから、間もなく女の兒を生んだけれど、異國の男の胤をやどしたと世間の人には卑められ、親は勘當、親類は義絶、たよる方

もない悲しさに、なにとぞ養育たのむといふ手紙を添へて、その赤兒をわしの門口へ捨てて行つた。それは霜の白い寒い夜で、赤兒はこの衣裳につままれて泣いてゐた。すてた親とはこれまで近しく附合つた仲でもなければ、あまりの可哀さ不便さに、死んだ女房とも相談して、わしが手づからその赤兒を内へ拾ひ入れ、わが子のやうに育てたが、髪の色といひ眼の色といひ、生みの母親に生寫して、異國の人の血をわけた雑種とは知る人なく、けふまで無事に濟んで来たが、心にかゝるは今度の御觸れぢや。切支丹宗門の根を断やすために、異國の血筋をひいた者は、のこらず詮議して召捕るといふ厳しい御沙汰。あんなにとしたもののか。長の年月育てあけて、生みの子よりも可愛と思ふ娘を、どうして繩付に出来ようぞ。わしの見る前で祝言したら、今夜にも二人は駈落しや。

二人。

助左衛。

え、  
若い者にはある習ぢや。色戀ゆゑの駈落と世間に披露すればそれで済む。京大坂どこでも構はぬ。遠いところへ身を隠して、二人仲よう暮してくれ。よいか。

二人。

はい。

(ふたりは夢心地、たゞ茫然と頭を垂れてゐる。奥より小間使おきみ出づ。)

おきみ。

旦那様。あのお寺様が……。

助左衛。

なに、お寺様が……。お、菩提寺の住職殿か。

おきみ。

急にお目にかゝりたいとおつしやりました……。

助左衛。

なにか知らぬが表の座敷へ御案内申せ。

おきみ。

はい、はい。(去る。)

助左衛。

内祝言の矢さきへ御出家が来るとは……。まあ、仕方がない。逢ひませう。

(助左衛門は奥に入る。)

お春。

(聲をあげて泣く。) はじめて知つたわが身の素性。長の年月明け暮れに、鏡にうつる顔を見ても……。(懐の鏡を出してわが顔を映してみる。) それとは知らう筈もなく、物心がついてから毛澤の悪いを苦に病んで、あたひの高い伽羅の油を京大坂から取寄せたも、今更おもへば無駄であつた。(鏡をすて、再び泣く。) 異國の人の血をわけて生れたものは獸のやうに卑しめらるゝが世の習ちや。所詮わたしは日本の人の数には入らぬ身で、世間の女子の眞似をして戀を知つたが恥かしい。これ、和三郎。因果な者に思はれて、おまへはなんとなることぞ。それがいとしい、氣の毒ぢや。と云うて、わたしは今更あきらめられぬ。いつそお

和三郎。

まへの手にかゝつて死んだら思ひも残るまい。さあ好いやうにしてたもれ。(男の膝に身をなげかけて泣倒れる。)

いや、いや。もうお嘆きなされますな。一旦御約束いたしたからは、たとひお前様がイスバニアの種であらうとも、朝鮮鞆靴の血筋であらうとも、今更變換へするやうな和三郎ではござりませぬ。親旦那さまの御意見にしたがひ、いづこの浦になりとも身を隠して、ふたりが仲好く添ひとけませう。薬で作つても男の端くれ、この和三郎を男と思つて、唯しつかりと縋つておいでなされませ。

お春。

そんなら祝言が濟んだらば……。

和三郎。

すぐにこゝを立退きませう。それに付けてもおまへ様の母御はまだ此世にゐるとのお話。もし近いところにあることなら、立際に一度お逢はせ申したいが……。

お春。わたしもそれを聞いてから、飛び立つやうに思うてゐる。そなたに何か心當りはないかえ。さあ、わたくしも承はるが今が初めてござりまするが……。 (思案しながら、ふと何か思ひあたりし様子にて、床の間より彼の短剣を持ち来る。) もし、嬢様。時々こゝらへ迷つて來るおまきといふ不思議な女を御存じでござりませう。

お春。

お、蛇神つかひとか切支丹とかいふ氣狂ひのやうな女であらう。

和三郎。

あの氣狂ひのやうな女が、娘に逢はせてくれと云うて先刻たづねてまゐりました。さうしてこれを娘に渡してくれと……。(短剣をみせる。)

お春。

え。あのおまきがこれを妾に……。そんならもしや……。

和三郎。

あの氣狂ひが何をいふかと、今までは氣にも止めずに居りましたが、だんくお話をうけたまはりますと、もしやあれが嬢様の生みの母御ではござりますまいか。

お春。

お。 (短剣と異國の服を持ちて起つ。) さうして、そのおまきとやは……。

和三郎。

どこへ行つたか判りませぬ。

お春。

先刻のことならまだ遠くは行くまい、(縁より駆け降りる。)

和三郎。

もし、嬢様。なにを云ふにも相手は氣狂ひのやうな女、確なことも判りませぬ。兎もかくも親旦那様と御相談の上になされませ。

お春。

いや、いや。生みの母様が知れたからは、ちつとも早う逢ひに行きたい。

和三郎。

でも、まあお待ちなされませ。

お春。

え。邪魔しやるな。

(支ふる和三郎を突き退けて、お春は下のかたへ走りゆく。和三郎もつゞいて追ひゆく。時の鐘キ)

こゆ。助左衛門は奥より出づ。

助左衛門。

や、娘も和三郎も……。こゝに置いた異國の服までが一緒に見えなくなつてしまつたは……。わしに碌々暇乞ひもせいで、わかい二人はもう何處へか墮落したか。はてなう。

(助左衛門は不審さうにあたりを見廻してゐる。下のかたより手代吉助走り出づ。)

吉助。

もし、旦那様。なにか御詮議の筋があるとのこと、奉行所から御役人衆の御出張でござります。

助左衛門。

奉行所から御役人衆が……。 (思案して。) よい、よい。すぐにこれへ御案内申せ。

吉助。

かしこまりました。

(吉助引返して去る。奥より法住寺の老僧日圓出づ。)

日圓。

唯今も申した通り、切支丹宗門の根を断つために、異國人の血をひいたものは男女の差別なく、阿蘭陀船へ積みおせて遠い南蠻へ追放するとの噂ちや。御當家の娘御のことを知つてゐるは愚僧ばかりでない。世間でも薄々は覺つてゐるので、もしやそれが奉行所の耳へでも這入つてはと、その御相談にまるつたところ、役人衆の出張とは何分氣がかりで

ござるな。

そんなこともあらうかと、娘にもよく因果を云ひふくめて、どこかへ姿を隠すやうに教へて遣つては置きましたが、もしやまだ其處らにうろくしてゐて……。〔不安らしく表を見る。〕寧ろもう戻らしてくれ、ばよいが喃。

〔下のかたより吉助は奉行所の役人岩瀬源之進を案内して出づ。ほかに捕方の者数人が提灯を持ちてあとより出づ。助左衛門は庭に降りて迎へる。〕

助左衛門。

夜中の御出役、御苦勞に存じます。

源之進。

このたび御吟味の仔細あつて、異國人の血をひいたる者はすべて届け出でよと申渡してあるに、當家の娘お春といふもの、いまだ何の届けもないはどうしたもののぢやな。

助左衛門。

恐れながら申し上げます。お春はわたくしが生みの娘、異國人の血をひいた者では決してござりませぬ。それは大方なにかのお聞き違ひでござりませう。

源之進。

〔捕方にむかひ。〕それ、道具屋利兵衛をこれへ呼べ。

捕方。

はつ。(ひとり下の方に去る。)

日圓。

差出がましい儀ではござれど、助左衛門は代々の檀家で法華教の信者に相違ござりませぬ。

源之進。

又その娘のお春もおなじ信者。それは愚僧が證人に相立ちまする。

いや、このたびの詮議は宗門改めでない。たとひその本人が淨土宗であらうと、法華宗であらうと、異國人の血を引いてゐるかぎり、残らず召捕つて阿蘭陀船に打ち乗せ、日本國より追放せよといふ御沙汰ぢや。

日圓。

しかし罪なき女子供までも遠い異國へ御追放は、あまりに不便に存じられますが……。

源之進。

慈悲を旨とする御出家としては、不便を加へらるゝも御もつともぢやが、これは江戸表よりの御沙汰でござれば、我々はたゞ御指圖にまかせて取計らうよりほかはござらぬ。お察しくだされ。

〔日圓も餘儀なく口をつぐむ。下のかたより捕方と共に利兵衛出づ。〕

源之進。

これ利兵衛。堺屋助左衛門の娘お春はイスパニア人の胤に相違ないな。

利兵衛。

はい、はい。あのお春と申しまするは助左衛門が實の娘ではござりませぬ。

助左衛門。

利兵衛殿。こなたは何の遺恨で、そのやうな云ひ懸りをさつしやるのぢや。お春は助左衛門が實の娘といふことは、こゝにござる和尚様もよう御存じぢやぞ。

利兵衛。

〔冷笑ふ。〕この堺屋は長崎の町でも指折りの大身代で、お寺様に取つてはよい檀家ぢや。そ

助左衛。

の檀家にたのまれたら、提婆を釋迦と云はうも知れまい。黙らつしやい。は、あ、こりや判つた。こなたは先刻のことを根に持つて、助左衛門親子に難儀を被せうと、無いもせぬことを訴人したのぢやな。いや、さうぢや、さうぢや。お役人さまに申上げます。これに居りまする利兵衛めは、御法度の抜荷買を巧らんでをる不届者でござります。わたくしにもその仲間入りをせいと勧めましたが、きつぱり斷つて遣りましたので、その返報にこのやうな跡方もないことを訴へ出たのでござります。

利兵衛。

え、途方もないことを……。わしはそんな覚えはないぞ。

助左衛。

え、今更おほえがないとは卑怯な奴ぢや。(利兵衛の腕をとる。) さあ、お役人の前で先刻のことをもう一度いへ。さあ、正直に申立てろ。さあ、わたくしは抜荷買の海賊でござりますと御役人のまへで眞直に白状しろ。え、云はぬか。(利兵衛を小突きながら前へ突出す。)

利兵衛。

(笑ふ。) 自分の詮議を逃れようとして、わしに濡衣を被せるのか。もし、お役人様。助左衛門は太い奴でござります。

助左衛。

いや、利兵衛こそ太い奴でござります。さあ、正直に云へ、白状しろ。

源之進。

兩人黙れ。利兵衛の詮議は追つてのこと、先づ差當つては娘の詮議ぢや。お春をすぐに

これへ呼べ。

日圓。

それは愚僧より申上げます。お春は店の若者と逐電いたしてござりまする。

源之進。

して、それは何日のことぢやな。

日圓。

今日の午頃でござりました。

利兵衛。

いや、そりや嘘ぢや。嘘でござります。現に午過ぎにも店にゐたのをわたくしが確に見とどけました。

助左衛。

え、又してもそんな云ひ懸りをさつしやるか。もう料簡がならぬぞよ。(利兵衛に掴みかからんとす。)

源之進。

騒ぐな、さわぐな。

(捕方は寄つて二人をひき分ける。下の方より捕方二人はお春を引立て、出づ。助左衛門も日圓もおどろく。)

捕方甲。

堺屋の娘お春が町はづれにうろくして居りましたれば、すぐに召捕つてまゐりました。手にはこのやうなものをしつかりと抱へて居ります。

捕方乙。

(源之進はお春がかへてゐる異國の服に眼をつける。)

利兵衛。

あれ、御覽なされませ。あのやうな異國の衣裳を大事さうに抱へてゐるのが確な證據でござります。どうぢや、助左衛門。こなたの娘は何であのやうなものを持歩いてゐるのぢや。

助左衛門。

源之進。

捕方。

お春。

もうよい。堺屋助左衛門は上をあざむく不屈者にきはまつた。それ、娘と共に引立てい。はあ。(助左衛門を取り巻く。)

(あわて、進み出づ。) あゝ、もし、しばらくお待ち下さりませ。もう此上はなにも彼も眞直に申上げますれば、父様だけはどうぞ御慈悲をねがひます。もし、お役人様。わたくしはイスパニアの人の血をわけた者に相違ござりませぬ。

助左衛門。

あゝ、これ、これ。うろたへて何をいふのぢや。お役人の前で迂闊なことを云うたが最後、もう取返しは付かぬぞよ。

お春。

これ、父様。(助左衛門に縋りて泣く。) 親にも世にも捨てられた、わたしを手づから拾ひあげて、大家の娘と敬はせ、十七年のけふが日まで結構に育て、くださった。御恩は云うても盡させぬものを、降つて湧いた今度の難儀に、わたしを庇うてお前までがもしや憂い目を見られうかと、それが悲しい勿體ない。もう斯うなつた上からは、所詮のがれぬ約束と

助左衛門。

わたしはさつぱり諦めました。かならず泣いて下さりますな。

だん／＼様子をうけたまはれば、異國人の血を引いたものは男女の差別なく、阿蘭陀船へ一緒にのせて、遠い南蠻へ追放すること。薬の上から拾ひあけて、生みの子よりも可愛いそなたを、他國も他國、日本の外へ手放して遣らうとは、あんまり悲しうて涙も出ぬ。(お春をかゝへる。) よく／＼そなたは不運なもの、世界に人も多いのに、なんで異國の子とは生れたぞ。日本中の因果といふ因果を、一つに背負つて生れたやうな、いぢらし

(利兵衛を睨む。) 罰はそつちへ落ちもせいで、こんな美しい可愛い、罪もない者の上におそろしい禍を降すとは……。あゝ、世のなかは暗やみぢや。

お春。

(泣く。) もう、なんにも云うて下さりませ。この年までに何ひとつ孝行らしいこともなく、また其上にこのやうなお嘆きをかける妾の罪は、どうぞ免してくださいませ。おなじ日本の中に生きてゐても、百里二百里と隔たれば容易にお顔は見られぬものを、まして千里やら二千里やら果てしも知れぬ異國へ遣られては、もうこれがお顔の見納めでござりませう。

助左衛。

お、いくら逢ひたうても逢ひには行かれず。いとしい可愛いそなたの顔も夢に見るよりほかはあるまい。(お春をひき寄せてちつと顔を見あはせる。)これ、わしの顔も覚えてるてくれよ。

お春。

あい。(泣く。)

源之進。

わかれを惜むは然ることなれど、阿蘭陀船はあすの朝の出帆ちや。お春は一先づ奉行所へ牽いてゆく。夜のふけぬ間に早う立て。娘が神妙に白状したれば、格別の慈悲を以て助左衛門にはお構ひないぞ。

お春。

え、ありがたうござります。そんなら父様。

助左衛。

どうしても行くのか。

日圓。

今となつては是非もござるまい。お春どの、たとひ異國の空にさまようとも、かならず日本の神佛を信心せられい。生きて故郷へ歸れずとも、死すれば魂は救はれて、再び日本へ歸られますぞ。

お春。

それがせめてもの頼みでござります。(しなくと起ち上る。)これは父母が形見の品々、身につけて參つても差支へござりませぬか。(服と短剣とを見せる。)

源之進。

苦しうない。勝手にいたせ。

(お春は會釋してゆきかゝる。この以前より和三郎も下のかたに忍びて窺ひあたりしが、この時つかくと進み出づ。)

和三郎。

嬢様……。

お春。

お、和三郎……。

和三郎。

何事もあれで承知いたしました。嬢様と一生のおわかれに、御餞別をお目につけて下さります。もし、鳥渡それをお貸し下さりませ。

(和三郎はお春の短剣を取りしが、たちまち抜き放ちて利兵衛の脇腹に突き立てる。利兵衛倒る。捕方はおどろき騒ぎて和三郎を捕へる。)

和三郎。

いや、決してお手向ひは仕つりませぬ。もし、嬢様。お前様のかたきはこの通りにいたしました。(剣を返す。)人を殺せばわたくしも命はござりますまい。御一緒に行かるゝものならば、千里が萬里でもお供をいたしますれど、逆も許さるゝ筈は無し、いつそお前さまの見る前で、かたきを殺して繩にかゝれば、お前様にも未練がなく、わたくしにも未練がござりませぬ。

助左衛。

おゝ、よう云うてくれた。かたじけない。思へば憎いこの利兵衛め。わしも刃物を持つてゐたら、その胴腹をぶぐつて遣らうものと、さつきから此手がむづ／＼してゐたところぢや。とは云ふものゝ、あたら若い者をこんな奴の命と取代へるのは……。

お春。

和三郎……。

利三郎。

嬢様……。

(ふたりは寄らうとするを捕方は隔てる。源之進は床几を起つ。)

源之進。

それ、人殺しの科人に繩を打て。

(捕方は和三郎に繩をかける。お春は泣き伏す。助左衛門も眼を掩ふ。日圓も珠数を爪繰る。)

(11)

塀屋の裏手。上の方へよせて風雅なる屋根つきの門あり。左右は竹垣にて、下のかたには大いなる土蔵の白壁みゆ。垣のなかには柳の立木あり。

(夜廻りの男、太鼓を鳴らして過ぐ。下の方よりおまき迷ひ出づ。)

おまき。

おゝ、暗い夜ぢや。いかに暗うてもわたしの眼は鼻ぢや。めつたに人を見はぐるまいぞ。

(門内をうかゞふ。)

(門内より提灯を持ちたる捕方ふたり出で、不審さうにおまきを見る。つゞいて門内よりおなじく捕方二人はお春を圍みて出づ。おまきは衝と寄りてお春の前に立つ。)

おまき。

これ、娘。どこへ行くのぢや。

お春。

おゝ、お前は母様ではござりませぬか。さつきからお前を探してゐました。

おまき。

わたしも先刻から探してゐた。さあ、一緒に来や。(お春の手をとる。)

捕方一。

これ、なにをする。退け、退け。

おまき。

これはわたしの娘ぢや。

捕方二。

なんであらうと手ざしはならぬぞ。

おまき。

いや、いや、娘は人には渡さぬ。わたしが連れて歸るのぢや。(また寄つて来る。)

捕方。

えゝ、邪魔するな。気がひめ。

(捕方はおまきを突きつけて行かんとするを、おまきは遮りて無理にお春を奪ひゆかんとす。捕方

も持餘して、ふたりは狂ふおまきの腕をおさへ付け、二人はお春をひいて行かんす。おまきは腕をおさへられながら追ひゆきて、口にてお春の袖をくはへる。捕方は引放さんとすれど、おまきは眼を嚙らせて衝へる齒をゆるめず。あまりの物すこさに捕方も躊躇するころへ、門内より他の捕方も細附の和三郎をひいて出づ。つゞいて源之進、助左衛門、日圓の三人出づ。それを見るより助左衛門はおまきのそばへ来る。

助左衛門。

これ、おまきどの。こなたから預かつた大事の娘御をかうした羽目に墮したは、かへすがへすも申譯ない。さだめて頼み甲斐のない奴ぢやと思はれうが、これも餘儀ない運ぢやと諦めてかならず恨んでくださるな。よいかや。さあ、判つたらおとなしく歸らつしやれ。歸らつしやれ。情を張つてゐると、こなたの爲にもならぬ。(宥める。)

お春。

母様。おなごり惜い山々なれど、どうでもお別れ申さねばなりません。もうあきらめて下さりませ。これ、母様……母様……。

源之進。

(おまきは袖を衝へしまゝにて頭を振る。お春は助左衛門と顔を見あはせて泣く。)

(進みよる。)

お春。

あれ。(寄らんとするを捕方はむごく引立てる。)

日圓。

多寡が女子ぢや。酷うなさるな。(お春に。)

お春。

父様。もうおわかれ申します。

和三郎。

旦那様。御機嫌よくお暮しなされませ。

助左衛門。

お、何事もみな食ひ違うて……。

お春。

わたしは南蠻の遠い國へ……。

和三郎。

わたくしは冥土の遠い國へ……。

日圓。

たゞ御佛の手に縋つて、來世の縁をお待ちなされ。

助左衛門。

いつまで云うても盡きぬことぢや。二人とももう泣かせずに行つてくれ。(顔をそむけて泣く。)

源之進。

え、まだ行かぬか。

(捕方二人はおまきを引き据ゑてゐる。源之進は先に立ち、捕方はお春と和三郎とを引立て、ゆく。助左衛門はあとを見送る。)

小笠原島

おまき。

綺堂戯曲集  
娘……むすめ……。

(おまきは捕方を突き退けて狂はしげに追ひゆかんとするを、助左衛門は支へる。夜廻りの太鼓の音遠くきこゆ。)

幕

明治四十二年五月作。

明治四十五年(大正元年)五月。東京座初演。

初演當時の主なる役割——小笠原貞頼(市川猿之助) 與平次(中村鶴藏) 那の葉(實川延太郎、後の河原崎國太郎) など。

登場人物——小笠原貞頼、巫子柳の葉。船乗與平次。ほかに貞頼の家臣、漁師。女房など。

伊豆の國、下田の海岸。上のかたに古き白木の華表あり。これに注連をばりて、爲朝明神の額をか。所々に巉巖屹立して、正面より下のかたには遠く海をのぞみ、烟をふく大島見ゆ。

(文祿二年九月の末。きのふの風雨の名残にて、社頭の落葉狼藉たり。巫子柳の葉、十八歳。下げ髪、白の狩衣、緋の切袴、端麗にして神のごとし。木綿幣かけたる柳の枝を手にして立つ。濱の女房二人、いづれも紅き頭巾をきせたる小兒を連れてひざまづく。)

女房一。おかけさまで子供達の疱瘡も、軽く癒りさうでござりますれば、お禮ながらお参りに出ました。

女房二。いかに祟の深い疱瘡神でも、爲朝さまの御威勢にはかなひませぬ。ありがたいこととござ

小笠原 鳥

ります。

女房一。

就きましては今一度、御稜をねがひたう存じますが……。

(柳の葉は無言にてまねく。女房どもは子等の手をひきて、うやうやしく進み出づ。柳の葉は形を正しうし、櫛を以て小兒の頭を三たび撫ふ。女房どもは禮して退く。)

柳の葉。

神を疑うてはなりませぬぞ。この上にも信心を怠りめすな。

女房。

はい、はい。仰せは決して背きませぬ。

柳の葉。

(女房等は子をひきて去る。遠寺の鐘きこゆ。秋の潮は岸に通りて聲あり。)  
もう夕潮の寄する時刻か。海の潮に満干あれど、人のこゝろは片時も休むひまなく、物を思ひつゝ、今日も暮した。

(濱唄の聲きこゆ。)

唄

わたしや大島御神火育ち、胸の烟は絶えやせぬ。

(小笠原民部少輔貞頼、廿三歳、割羽織、野袴。霸氣ある面に憂愁を含みて出づ。)

柳の葉。

おゝ、殿様。けふも御参詣でござりましたか。

貞頼。

貞頼、いさゝか心願の筋あつて、かやうに日参いたす。昨夜は強い風雨であつたが、神社

に障りもなかつたかの。

柳の葉。

はい。別に障りもござりませぬ。(云ひかけて少しく躊躇ひ)近頃ぶしつけではござりまするが、お前様は抑もどのやうな御心願があつて、日々御参詣遊ばされまするな。

貞頼。

われに心願の趣意を云へとか。語つても益ないこと、聞いても詮ないことぢや。  
(貞頼はさびしく笑ふ。柳の葉は熱心に問ひつゞける。)

柳の葉。

不束ながらわたくしも、神に朝夕仕ふまつる者。ことの仔細を仰せ聞けられて下さりますれば、その御心願かならず成就遊ばすやうに、わたくしも共々に祈りまする。

貞頼。

なにさま餘人とは違つて、神に仕ふるそなたの間ぢや。心願の趣意、語つて聞かさう。昨年春以来、大明征伐の軍はじまりて、日本國の大小名、海を越えて先づ朝鮮に押渡る。その砌、かくいふ貞頼も小西殿の手につけられ、釜山より進んで京城に攻め入るあひだ、度々の合戦に曾ておくれを取らず、我ながらあつばれの働きしたりと思ひのほか、大將には些とも御賞美なく、差したる軍功もなき徒に、却つてしばし感状をあたへらる。さりとは餘りに依怙の沙汰よ。かくては何のためにか生命をなけうつて奉公すべきと、積る不平はおさへ難く、遂に病氣と云ひ立てゝ、途中より本國へ引揚げたぢや。

柳の葉。

さては御病氣と承はりましたは、まことの事ではござりませぬか。

貞頼。

假病、勿論假病ぢや。ついでには世のなか面白からず、たゞ鬱々として日を送る。殊に我は次男と生れて、小笠原の家督は兄上相續したまへば、有つても無うても事缺かぬ身の上、所詮は弓矢を折つて捨て、佛門に入らむかとも存じたが、さてそれも無念でなう。かゝる折にたのむは神と、年ごろ信ずるこの爲朝明神に日参して、わが胸にあまる不平を訴へ、あはせて未來の開運を祈つて居るのぢや。あれ、あれに烟を噴く大島をみよ。爲朝公もこのころざしを得ず、一旦はあのはなれ島に憂き月日を送られたが、時到つて海をわたり、遠に琉球一國の主となられた。けにも日本武士の鑑、羨ましいぞ。(海を望みて慨然。)

柳の葉。

今もむかしも運不運はのがれぬ世の中に、その御述べは御もつともでござりまするが。お前様はこの下田奉行のお家筋、たとひ御次男ともあれ、誰が侮り輕しめませうぞ。まして弓矢取つては聞ゆるお人、いつまでか埋もれておはすべき。御運開けて世に出でられまするも、遠からぬ程かと存じますれば、左のみ御苦勞遊ばしまするな。

貞頼。

下田奉行がそれほどに尊いか。家柄を申さば小笠原もむかしは信州深志の城主、武運拙なうして武田のために追ひ落され、子孫流浪して或は豊臣家に仕へ、あるひは徳川家にした

がひ、わづかに一縷の家名を繋ぐ。さりとは腑甲斐ないことではないか。まして應仁以來みだれたる世の中も、此頃やうやく治まりて、志ある者も今は手足をのばすに由なく、腕をさすりて空しく無事に苦む。たまく時節到来とよろこびて、待設けたる大明征伐の軍も、右の始末にて我また志を得ず。これを懐ひ、かれを思へば、不平はいよく募るばかりぞ。察しておくりやれ。

柳の葉。

われも人も、思ふことのかなはぬほど、苦しいものはござりませぬ。わたくしの今の身にひきくらべて、殿の苦しきお胸のうちも、左こそとお察し申しまする。

貞頼。

わが身にひきくらべて……。扱はそなたにも人知れず、心を苦むることがあるか。

柳の葉。

ござりまする。死ぬよりも苦しい、切ないことがござりまする。

貞頼。

左様かなう。いづこも同じ秋のゆふぐれとは好う云ふたものぢや。

(とばかりにて、別にその仔細を問はざれば、柳の葉は本意なげに差うつむく。夕風はふたりの袖を吹きて、木の葉はらくと散る。貞頼はやがて起ちあがる。)

貞頼。

おゝ、日もやがて暮るゝであらう。いざ、参拜いたさうか。

(貞頼は華表の中に入る。柳の葉は暫し悄然としてゐるが、これも漸く起つて行かんとす。船乗

與平次、廿五六歳、筋骨たくましく、愚直なる人物。濱傳ひに來かゝりて、椰の葉の物思ふ風情を視つ、慕ふがごとく、又怖るゝが如くに窺ひぬたりしが、この時つかくとあゆみ寄る。

椰の葉。(見かへる。)おゝ、與平次どのか。

與平次。はい。

椰の葉。けふも御參詣でござるかの。

與平次。今夜、八丈へ船が出ますで、海上安全を祈りにまゐりました。

椰の葉。よう御信心なされい。

(云ひ捨て、行きかゝるを、與平次は怖る怖る止める。)

與平次。もし、もし……。

(椰の葉、見かへれば、與平次は出したる手を縮めて、黙してその顔を打守る。)

椰の葉。わたしはもう夕神樂の支度をせねばならぬ。後に又逢ひませうぞ。

(椰の葉は行きかゝる。與平次は又寄りて怖る怖るその顔を覗く。椰の葉は見かへりて彼を睨めば、與平次は恐れて退る。椰の葉はしづかに華表のうちに入る。)

與平次。胸一ぱいに思つてゐることも、神様のやうなお人の前では、萬分の一も云ひ出されぬ。

(ため息をつく。)

(漁師岩藏、磯七、出づ。岩藏は手に信天翁の死したるを持ち、磯七は椰子の賞を持つ。)

岩藏。おゝ、與平次。こゝにゐるか。

磯七。えゝ、何をほんやりしてゐるのだ。これ、こんな物が流れて來たぞ。

(二人は信天翁と椰子の賞を見せる。與平次は懶げに見かへる。)

與平次。むゝ。して、それはどこで拾つた。

こなたも知つてゐる通り、一昨日から昨日にかけては、近年にない大時化、おまけに南風が強かつたで、濱へ吹きよせた流れ木は山のやうであつた。

與平次。それはいつもの事ぢや。めづらしくもあるまい。

岩藏。いや、珍しいと云ふのはこの二つだ。わし等も長らくこの濱に住んでゐるが、一度も見た

ことのないものばかり、兎もかくも話の種に拾つて來たが、一體これはなんといふ鳥であらうな。

與平次。(や、誇るがごとく。)お前等は漁師、わしは船乗、遠い海のことはおれの方がよく知つてゐる。その鳥は八丈あたりへも時々寄つてくる水鳥で、からだかそんなに大いくせに、至

つて意氣地のない奴だから、島では阿房鳥とも馬鹿鳥ともいふとよ。

岩藏。なるほど、こなたは詳しいものだ。これが話に聞いた阿房鳥と云ふのかなう。

磯七。では、これも知つて居ような。

奥平次。(椰子を見て。)それも時々八丈へながれて来るが、島の者も名は知らず、なんでもあつた

かい國に生えてゐる木實であらうと云ひ傳へてゐる。先づおれの鑑定では、八丈よりも遠

い遠い南の果に、人のかよはぬ島があつて、鳥も木實もそこから出るに相違あるまい。お

ほかたそれ等もきのふの南風で、遠い沖から吹き寄せられたのであらうよ。

さう聴けば左もありさうなことだ。これほど大きな鳥や木實が育つやうでは、その島とい

ふのも屹と大きい國であらうな。

もしや鬼が島ではあるまいか。はゝゝゝ。

(小笠原貞頼、華表のうちより出づ。かくと見るより、みなく形をあらためる。)

三人。おゝ、殿様でござりましたか。

貞頼。こりや、奥平次。唯今あれにて承はれば、大島または八丈島より、更に遠き南の海に、

船も通はぬ島があるとか。

奥平次。この二種が論より證據で、八丈よりもつと南に、名も知れぬ島があるに相違ござりませ

ぬ。

貞頼。なにさまなう。(思案す。)

(岩藏等は貞頼の前を憚りて、たがひに顔を見あはせる。)

岩藏。どれ、わし等も行かうかの。

磯七。殿様、御免くださりませ。

(奥平次も黙禮して起たんとす。)

貞頼。こりや、待て、待て。奥平次には猶たづねたきことがある。他の者には構ひない。行け、

行け。

二人。へい、へい。

(岩藏と磯七は會釋して去る。)

貞頼。奥平次、苦しうない。近う寄れ。

奥平次。へい。

貞頼。この濱に船乗多く住むなかにも、其方は齡こそ壯けれ、きこゆる巧者ぢや。八丈あたりの

小笠原島

奥平次。

海の案内、よう心得て居るであらうな。

自慢ではござりませぬが、一年に二度はかゝさぬ八丈通ひ、海の上の案内は、ねたくしほど心得た者はござりますまい。

貞頼。

ぢやによつて頼みがある。なんと其方、案内してはくれまいか。

奥平次。

へい。どこへ……。

貞頼。

貞頼、みづから海を渡りて、八丈の南、人の知らざる島々を探り出さうぞ。

(奥平次は惘れて貞頼の顔を仰ぎ見る。)

奥平次。

とんでもねえことをおつしやります。お前様方にはなんにも御存じござりますまいが、八丈までの船路でもなかく、容易なことではござりませぬぞ。陸に近い海とは違つて、遠い沖へ出ますれば、潮の満干も定まらず、あるときは西へ退くかと思へば、又あるときには東へも退く。わけて怖ろしいのは、卯辰の方から差す潮と、申酉の方からさす潮で、この二すぢの潮は旋風よりも早く、何百里の遠い果から、大山のくづれるやうに押寄せてまゐります。その勢ひのすさまじいことは繪にも口にも盡されぬくらゐ。何十間といふ大鯨でも、これに逢へば隣くひまに押流されるといふので、大抵はお察しなされませ。むかしか

貞頼。

ら船乗仲間では、潮ともいひ、また山潮とも申しまして、これを取り切るのは、命かけの働きでござります。八丈あたりですらも其通り、ましてそれよりも南の果には、どのやうな怖ろしい潮が来るか、何のやうな怖ろしい魚が棲むか、判つたものではござりませぬ。いかな私でも、この御案内ばかりは眞平御免くださりませ。

水を家とする其方共も、さほどに海がおそろしいか。むかしの八幡船は四國九州を出でて唐土をさわがし、近きころ堺の商人は呂宋南蠻にも向ひしと聞く。八丈より南にある島國、いかに遠くとも唐土南蠻ほどにはあるまい。わが知るところによれば、この下田より大島まで十三里、八丈島までおよそ八十里、順風に帆をあぐれば、二晝夜にしてこの島々をめぐるると云ふぞ。その上に遠く進むとも、おほかたは百里か百五十里、多寡が三日か五日の船路ぢや。たとひ波風に阻められうとも、十日か半月をよも越えまい。怖ろしき潮に逢はば、なんぢ等楫柄を把りて漕ぎぬけよ。おそろしき魚あらはれなば、われ剣を把りて斬捨てうぞ。

奥平次。

して、その島を探しあて、どうなされうと思召すのでござります。

貞頼。

云んでもないこと。貞頼取つてその領主となるのぢや。日本廣きに似たれども、限りなき